

全国同人雑誌評

●「アルカイド」(大阪府) 70号

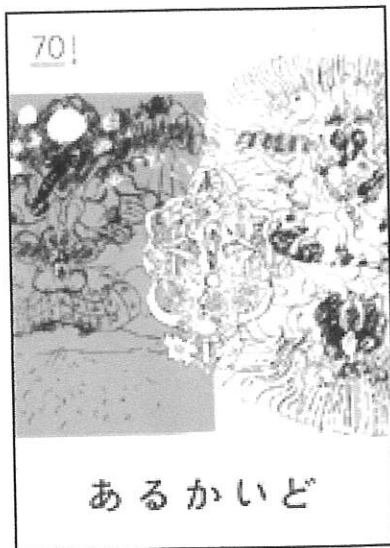
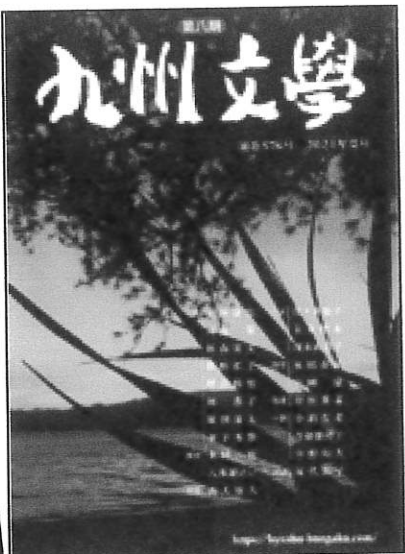
この誌は以前地味だが手堅い作品もかなりあった気がし、人生の深い軌跡を味わえたと記憶するが、今は全体に若返って、うまさや読みやすさが目立つ新装感が被うようになっていいる。それらが表面の新しさや親近感に流れて、問題や生命の奥に入っていない恨みがやや残る。

高原あふち氏の「卵を抱えて」は、不妊問題を軸に爽やかな日常仕立てにして新鮮な文章でおもしろく読ませていく。その技量レベルは高く、読者を飽きさせない。ただ、この牽引力は枝葉の魅力であって、本質的な深さに到達しないもどかしさがある。このテーマは女性にとつては普遍的な主題である以上、二つのものが要求されるだろう。誕生と死に関わる問題をどこまで生命の相として掘り下げられるか、またそれを個人の体験の唯一性の中にどのようか発見していくか——この二つがしっかりしていないと、純文学作品としては成立しにくい。最後も「黄体ホルモンの数値が」「ついに正常値になった」という終わり方ではないかにも弱く、とても「誕生」の奥にある生命の秘密には達しない。こう考えてくるとタイトルも一見おもしろく、魅

しい。

●「九州文学」(福岡県) 576号

新しい編集体制になった「九州文学」は、表紙も一新され、全体に手取りやすくなった親近感があるが、それぞれの小説の頭に要約紹介のような短文が付いているのはやりすぎで、不要の味消しになっている。また相変わらず柱がページ下に付いていて、見にくい。これはどの同人誌にも当てはまるが、商業文芸誌の「文学界」に倣って柱を下に付ける悪習が蔓延してしまった結果がいまだに残っている。本来柱は上にあるべきものである。ページに隣接し混同しやすい点も、難がある。また各ページ右下に「九州文学/576 2021年夏」とあるのも、表紙で十分わかることなので不要で、読者にとっては重複感が煩わしいだけだろ



あるかいど

力があるが、深淵を匂わせる言葉としては奥に乏しい。文章は現代風の華やかさがあり、読ませる豊かさがあるので、それだけに流されず、テーマを捉え切れれば、飛躍が期待できる書き手だろう。準優秀作。

この誌はどの作品もまとまっており、文章の水準は皆高い。編集や合評会は丁寧にしつかりなされている感じがある。七〇号の蓄積に実がある。

猿川西瓜氏の「パニラ」は、独特の発想で描かれる一種の未来小説だが、「図書館の自身が、今、ほとんどカラになった」という着想などおもしろい。「パニラ」の匂いが小説のテーマにどう関わるのか、その収斂のさせ方に無理があるが、一つコツを掴むと、いい世界が展開していきそうではある。持続してこの未来社会を掘りさげていってほ

う。

「海影」(中野和久)は、珍しいヨット航海の力作小説である。鹿児島島の南西に延びる諸島をトカラ列島から奄美大島までの巡航の途中に嵐に襲われ、転覆するストーリーを軸にしていて、しつかり書けている。遭難のヨットの内部は迫真力がある。ただ、導入部が露天風呂となつていのはいだけない。海洋小説であるなら海で始まるべきで、全体との関連が薄い場面から始めるのは不利である。またこの小説では、愛妻の死が大きな動機になっていて、海へ散骨のために航海するので、これをもっと早くに出すべきで、後半に出てくるのはあまりに遅すぎる。また最後が遭難のピークで終わっているのは、助かったのか、このまま死んでいくのか、わからないままなのは、収束感を欠いている。妻の死が航海の動機であるならば、この小説の結末は「助かる」方向にしか見出せない。死を乗り越えることが、妻の遺志でもあるだろうし、文学としての果実をもたらすことになるからである。偶然による救いの手の中に深い摂理を感じるのだが、この小説の真の奥行きを作るだろう。書き直して小説として成立する姿に持つていく作業が残っている。いい題材だけに惜しまれる。タイトルももう一つ決まっていな。このままでは準優秀作。

歴史小説「錯乱」(小泊有希)は、戦国期の九州の雄大友宗麟の一時期の錯乱を描いて、鮮やかである。毛利の九

州へ伸ばす触手に対しての反応がよく捉えられている。これに前後の成り行きが少し加えられて九州史の全体感が添えられれば、歴史のうねりは一層大きく体感できただろう。これも準備優秀作としたい。

●「海峡派」(福岡県) 152号

「海峡派」は継続号数は全国ベストテンに入る伝統誌で注目しているが、最近は少し陰影の薄い作品が目立つように感じる。この傾向に危惧を覚えていたところ、最新号に高崎綾子氏の「木語」を読んで伝統らしい深みを再認識した。筋の流れは夫婦間の不協和音から精神疾患になり別居によって自分を取り戻そうとする女性の回復の過程だが、最初の転居の部屋の描写から始まって公園の描写などが卓越している。この描写に厭世的トーンが流れていて、孤独感と相俟っていい旋律になっている。この魅力は大きく、それによって深く引き込まれていくのだが、人物が出てきと弾んでしまい、それまでであった描写の短調のトーンが変わってしまう。これだけの描写力があるのに、会話によって逆方向へ向かうのが、惜しまれる。これは会話の言葉に込めるものが、平面的であることによってはと思われ。「海峡派」の書き手の多くが、会話を会話として流している、その奥にあるものに目を向けない傾向がある。会話は確かにそれだけでおもしろい、弾む性質も持っているもの

のない力量ではち切れている。

巻頭作の「鉄棒の前で」は、神戸のエルマール文学賞も受賞している水無月うららの作品で、炭酸飲料のような弾ける文体にセンスのいいストーリーが組まれていて、洒落た味のある姿を立ち上げている。鉄棒の前にいた女性を旧友と勘違いして、そこから長く連絡を絶っていた旧友に電話をする話の起こし方は鮮やか。高校時代、互いに憧れていた教師が実は性的悪戯の常習犯だったことを知って、それまで燃っていた蟠りが一気に溶けて、あらためて卒業してからの人生を振り返る流れは快く振り切ったスイング感がある。言葉の連なりを高校生のような未熟感の色で染めている点が魅力でもあり、物足りない点でもある。ただ、作り方はうまくなっている。この作家は、他の同人誌にもいくつも発表していて、紡ぎ出さずにはいられない旺盛な創作力は、注目すべきものがある。いつか本物に化けることを期待して推薦作としたい。

この誌の発行の中心になっている黒住純氏の「ナガレの教室」は、物語をグイグイ進めていく筆力はすばらしいものがある。特に前半の牽引力は滑り出したら止まらない奔流の勢いを持つ。障害者となったガールフレンドを追って一流高校の入試を放棄して彼女と同じ高校に行くくんだりやそこで「ナガレ」という天才的個性と出会って、彼の開発したという投資ソフトを自身も手に入れるまではいい。し

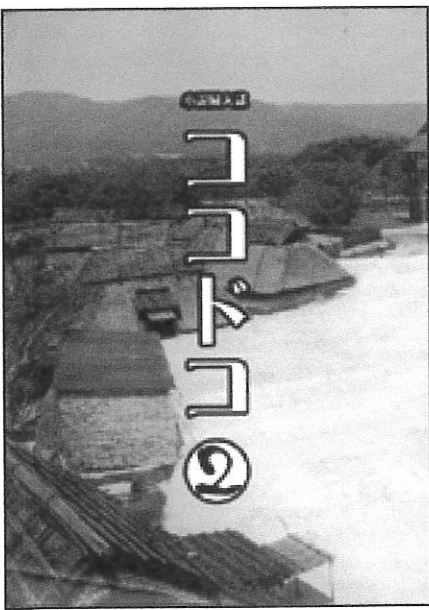


だが、氷山のように隠れた下部もある。この小説はテーマからしてこの隠れた部分を大事にしないと、全体の味が変わってしまう。また浮浪者っぽい若者から荷物を預かるのだが、この若者が生き生きしすぎていて、孤独な女性を救いに来る幻想としての人物にしては、あまりに明るく動いて違和感がある。これらを処理するのはたいへんな作業になると思うものの、この小説全体の捨てがたい魅力は否定できない。修正がうまくいけば優秀作に推したい作品だ。

●「ココドコ」(大阪府) 2号

この誌は、創刊2号目の新しい誌でフレッシュな空気に満ちている。誌タイトル「ココドコ」は奇妙だが、わからないようなこの言葉をおつきらほうに使うところも新しさかもしれない。書き手も皆創作意欲が旺盛で、ほとんど差

かし後半になってそれで大損をし、家庭が崩壊しかけて警察沙汰になり、すべてが壊れかけてまた修復され、日常に戻る下降的な展開はいただけない。むしろその投資ソフトをプラスの方向に動かして、何億円も稼いでしまう方が、おもしろくなると惜しまれる。家庭を見直す方向に内側に折れてしまったのは、フィクションの翼を自ら折ってしまったようなものだ。もともと前半は、リアリティを半分犠牲にした架空の滑空感で出発している。この翼で滑り出したのなら、最後までこの虚構創作を発展の側で勝負してほしかった。高校生で何億もの大金を手にする危険は、当然恋愛や友情や家庭や社会をも根底から問い直す位置に立たされるからである。そこからの批判の方がエリート



親の生き方をも指弾できるだろうし、世の中の様々な矛盾にも抗議できるだろう。その位置から「ナガレ」と二人して社会や受験体制を批判し、そして最後に当然挫折し、倒れる方が、ドラマとしてはるかに大きくなったはずである。フィクションの役割はそういうところにある。この小説は四五ページにわたり原稿用紙一三〇枚もの長さがある。後半をしっかりとさせれば二〇〇枚くらいの長さになっただろう。もともと長編小説の素材である。おそらく筆者もそれは感じていたはずだが、時間に追われ、やむなく矮小化してしまったと察する。力のある書き手なので、社会への批判精神を大事にして、完成を目指してほしい。今のままで準優秀作。

●「琅」（神奈川県） 39号

「琅」はユニークな立ち位置を示していて、巻頭の「論壇」として「コロナ禍迷走を憂う」（金子哲也）が二〇ページにわたっている。またエッセイとしてある「たかが川柳されど川柳」（上野一彦）は最近の世相を揶揄するものを集めて一〇ページをなしている。「怖いのはコロナじゃないよココロだよ」「オリンピック バッハ一人が指揮を執る」などおもしろい。また「私の文学散歩（一六） 逗子・葉山に、鏡花の足跡を探す」（松村茂治）も一四ページに及ぶ文学紀行である。おもしろいのは巻末のエッセイで、「幼い頃の忘れ得ぬ味」（浦野裕司）として、「冷めたビ

上にきみたちの心が傷ついているはずだよ。なぜならきみたちがやったことは人の道に外れた恥ずかしい行いだからだ」
特に強烈なのは朝鮮民謡の詞である。

「口の利ける野郎は 監獄に

野良に出る奴ア 共同墓地に

餓鬼の一匹も生める女つちよは 色街に

畚の担げる若え野郎は 日本に

こんで何にもかかも素っからかんよ

八間新道のアカシア並木 自動車の風に浮かれている」

結局この朝鮮人家族は北朝鮮へ移住していくのだが、過去に日常の周りに多くあった朝鮮人の姿をよく浮かび上が



【巻頭】

フテキ」や「石焼き芋」や「銀座ウエストの焼き菓子」など、体験の中での「最高の味」を書き綴っている。確かにそういう味は、存在するだろう。新入社員の頃初めて食べた「冷めたビフテキ」の味は神戸の老舗店の最高級ビフテキよりももっと「うまかった」とする実感はよく伝わってくる。

小説は一篇だけだが、「椿の木の下で」（ゆとり満）は、過去の朝鮮人家族を描いて、鋭い刃を突き付けてくる。文章は平板で、メリハリもなく、日常的に事実を語るだけだが、書かれている内容は、逆に胸を抉ってくる。戦中に日本に鉱山労働者として送られて来た朝鮮人が帰り損なうままに日本にいるが、聡明で思いやり深い日本女性と結婚する。しかし生まれた子供を周囲の子供たちが虐め、差別して遊びから疎外する。それに対しての父親の朝鮮人の言葉が胸を打つ。「人間にとって一番大切なものは誇りだよ。自分や自分の国を大切に思い、他のだれにも負けないで胸を張って自慢にできることだ。朝鮮人は朝鮮人の、日本人には日本人の誇りがある。それをなくしたら人ではなくなるほどの大切なものさ。生きる価値と言ってもいいよ。それ故その誇りを傷つけられることは一番の恥になるんだよ。だから誇りを傷つけられるようなことはしてはいけないんだ。きみたちが先ほどうちの（子供）明德にしたことは明德の誇りをひどく傷つけたんだよ。しかし、本当は明德以

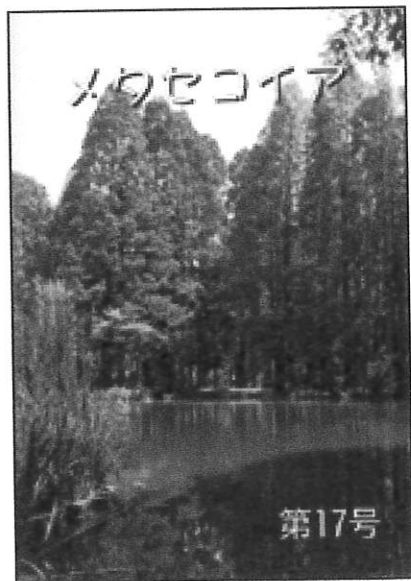
らせていて、あらためて問題提起をしている。インパクトは大きい。導入部に孫の不登校を持ってきて彼に語り聞かせる形を取っているが、それは不要だろう。まっすぐ子供時代に入っていく方がいい。いろいろ直してほしいところはあるにしても、たくさんの人に読んでほしい内容を有している。北朝鮮に渡ってからのことまでフォロワーできればさらに深みを増すが、ここまででも十分推薦作に値する。

●「メタセコイア」（大阪府） 17号

この誌の書き手は実力者揃い。鍛えられているせいかな、どの小説も書き出しはうまい。すぐ流れに乗せる歯切れのよさがある。

巻頭の南田真氏の「真黙な拳」は、同人雑誌としては珍しいボクシングの世界を描写している。ボクシング・ライターの目を借りて話を進めているが、ジムや興業主やマスコミ、世界選手権の舞台裏など幾相もの実態もかなり捉えていて、話の展開は淀みなく、グングン巻き込まれていく。世界へ挑戦する向上メモメントも強く、最後まで一気に読ませる筆力は、優れた技量を示している。場面の終わり方場の転換など、うまい。ストーリーは、世界戦へのステップとしての試合において、いったん不正判定によって、敗北するが、ライターの活躍によって再戦が実現し、最後の最後に逆転勝ちするフィナーレとなる。活劇として、手に汗握る盛り上がりで、スリルは堪能させられるものの、読

み終わって、その結晶度にもう一つ不完全燃焼の煙りが残る。それがなぜか考えた。タイトルの「寡黙な拳」の「寡黙」はこの新人ボクサーが東北の津波の被害者の過去を背負っていることに拠っている。両親も津波で死んで、その後は家を持たずに転々とする孤独な生を運命付けられる。この少年期の過去が、リングの格闘のここぞというときに一つの力となって湧出してこないところが、収斂感の乏しさに繋がっているように思われる。せつかく東北津波を引きずっている主人公に設定したのに、それが後半十全に反映されていない点に、この小説の決定的なインパクトの欠如がある。およそボクシング小説なり、野球小説なり、剣道小説なりのスポーツ小説は、虚構の世界であるならば、勝敗は自由に構築できる。そこまでのスリルは書き手の腕によって自在に盛り上げられる。要はいかに最後のクライマックスを盛り上げるかということになるのだが、文学としてはもう一つそこに決定的なものが入る必要がある。それはいかにそこに人間を描き込むかということである。格闘や勝負の迫真力だけならば、テレビやインターネット動画でも伝わってくる。小説にすることは、勝負のその奥にいかにも人間としての火花を放っているかということに尽きる。その火花が真実であり、人間の奥底に生き方として達していれば、勝利しても敗北しても、永遠の火花として胸に残るだろう。この人間個人が放つ生き方としての



火花が大事なのであって、それを捉え切ることが文学だろう。このボクサーにはクライマックスにおいて出てくるべきそれがない。「寡黙」の奥にあるものが拳の一閃となつて怒りの世界そのものを切る——それがクライマックスにおいて放たれるべきだろう。また激しい練習に耐える力もその「寡黙」に繋がっているはずである。「寡黙」の人間像が乏しい。

そこまで直してもらえば、この小説は優秀作に値する。

●「新生」(東京都) 15号

「新生」は文芸同人誌というよりも、高度な知識雑誌の風体がある。その内容は、重要な思考や知識を多く含み、学ぶことが多い、有益な雑誌である。巻頭言においても、主

宰の篤一夫氏がこの五月に発された「日米首脳共同声明」の危険性を指摘している(※341Pに一部転載)。他にも「日本洋服百六十年史」(中尾幸造)、「隅田川に架かる鉄道橋の話」(長野眞)、「風に吹かれて(4)ヨットと水素利用」(松尾晃)、「日本近世後期の人々の生活」(けいのえいち)、「ウィリアム・アダムス(三浦按針)と平戸」(立木正昭)、「私が読んだ世界の名著(第4回)」(宮田岳南)など、啓発される文章がいっぱい。得難い知識が満載である。特に「ヨットと水素利用」は、これからの省エネ時代の航海や交通機関の未来図が写真や図入りで紹介されていて、大いに勉強になった。石油燃料を使わないで現在航海している「オデッセイ号」の話や、風力による水流発電で水素をつくり、貯蔵して、水素燃料電池発電で船

を進める未来型推進船の話など、興味は尽きない。オデッセイ号の斬新な船体写真もあり、太陽電池パネルが甲板に敷き詰められていて、全体が二本のフロートによって浮いている図は、実に斬新な船の未来像を感じさせる。推薦レポートとしたい。

稀有な知識教養・情報交換の誌として、珍重すべき存在である。

今季をまとめる。

▲優秀作「木語」 高崎綾子「海峡派」15号

▲推薦作「椿の木の下で」ゆとろ満「琅」39号

「鉄棒の前で」水無月うらら「ココドコ」2号

「風に吹かれて(4)ヨットと水素利用」 松尾晃 「新生」15号

準優秀作

「卵を抱えて」高原あふち「アルカイド」70号

「海影」 中野和久「九州文学」576号

「錯乱」 小泊有希「九州文学」576号

「ナガレの教室」黒住純 「ココドコ」2号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)



●「朝」(東京都) 42号

「朝」は、初めて読む同人雑誌だが、軽さの中に味がうま
く散りばめられている不思議な酒脱感がある。前半は小説
創作、後半は「コロナ禍と東日本大震災から10年」という
エッセイ特集を編んでいる。村上玄一氏が発行人となつて
いて、前半でも「自慢風まかせ5」を小説として書いてい
る。この内容は学習研究社発行の「季刊フェミナ」「小説
フェミナ」の副編集長としての活動をエッセイ風に記録し
たもので、当時の雑誌作りの事情がありありと伝わってき
ておもしろく読ませるが、単なる記録としての文章以上に
何が残るかという点、それ以上には響いてこない淡白さが
感じられる。これはこれで一つの姿勢でいいが、エッセイ
も含めてそれがこの誌に通底する一つの傾向とも言える。
それを踏まえ、この傾向の味を引きずりながらも、巻頭
の「夢で会いましょう」(天野いずみ)は、よくまとまっ
た姿を作っている。このタイトルは昔テレビ番組であった
気がし、この軽いニュアンスのタイトルを半信半疑で読み
始めたが、夢で性交する出だしから始まって、高校時代に
廻り淡い恋の奥に潜んでいたものをあらためて夢を通して

もよいという法律が国会で通り、それを実行する医師の内
部の葛藤を描いている。今後老人の人口比率が増し、老人
医療が財政を破綻させる懸念から、老人人口を意図的に減
らす方向に舵を切る政治は、あながち想定できなくはない
ただ、そこへ行くまでもう何段階かを踏まえるだろうと
は思うが、この小説はそれが決定されたところから始まっ
ている。そこからは、小説としてよく流れ、テーマが重い
だけに興味深く進行する。最後は新人看護婦のヒューマニ
ズムによって、安楽死を施した患者が救われ、医師もあら
ためて良心に目覚めるのだが、小説として解決していても
全体に何か重い澱みが残る。それは、現在も増え続ける老
人人口が厳然とした問題を抱えていて、なお深刻化してい
るのが現実であるからだろう。この根本解決は、物理的な



朝

コロナ禍と
東日本大震災から10年

82

掘り出す過程は、自然で流れがいい。クラス会をうまく布
置し、彼に再会することを期待して幹事役に尋ねた結果が、
「死んだ」という答になって返ってくる。夢が間接的に死
を知らせる現象と重なってくる。修学旅行での二人で見上
げた星空の美しさと、最後に死を知らされて眺める星空の
呼応とが生きている。やや中間小説のニュアンスもあるが
優秀作としたい。

●「九州作家」(福岡県) 134号

一三四号という号数は、敬意に値する。持統号数はおそ
らく日本でベストテンに入るだろう。この誌は、医学関係
の専門知識も匂っていて、医師や法律関係の知識人が同人
に揃っている気配がある。七十人近い同人数にも驚かされ
る。

巻頭の「法殺考」(波佐間義之)は、問題提起小説である。
八五歳以上の重度介護老人は、医療によって安楽死させて

処理以上に、良心の抛り所をどこに置くか、むしろ文学的
な問いを深めることにあるはずで、この主人公だけの良心
の目覚めでは補いえない。作品としての評価も、法案が国
会を通ったこの想定を、是とするか非とするかで異なっ
てくる。判断の難しいところで、推薦作にすることでひと
まの評価にしたい。波佐間氏はすでに九州でも知られた存
在であり、銀華文学賞でもまほろば賞でも実力を発揮して
いる作家なので、この老人問題の深淵を文学作品にしてい
くことには大いに期待したい。

●「札幌文学」(北海道) 91号

一〇〇号に近づいてきた札幌文学だが、内容も健在で、
今号は特に充実している。巻頭の「『よもつ耶』〜更待月
のこと」(海邦智子)は、変わったタイトルからして独創
性が感じられる。愛妻と子供を一度に失って悲しみに暮れ
る男を「よもつ耶」という寄合の場が癒す設定だが、部屋
がみな月の名前になっていたり、あの世とこの世の境を象
徴していて、場そのものに雰囲気がある。そこに住んでタ
クシーの運転手のような仕事をしていくこの男に、やはり
変わった乗客が乗ってくる。最初に乗せた老婆は、不倫の
恋をして、たかさんの人を裏切って恋を成就させたが、そ
の男に先立たれてしまう。「たかさんの人を傷つけて、裏
切って……」「あの人の家族にとっては、私は人殺しでし
かありません」という重荷を背負って生きている。死を待

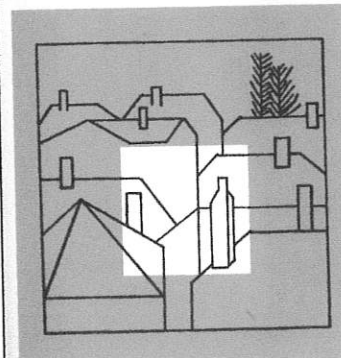
つ人。死の向こうに引き込まれていくことを願う人が乗客なのだ。次に乗ったのは大蔵山シアンツェでいつもジャンプをしていたスキー選手の母親。毎日夜遅くまで練習しているその息子が、この世からいなくなり、それを追うために、「大倉山へ」と目的地を告げる。ジャンプ競技場で死んだ息子を思い出す。「札幌の街どころか、空に飛んで行っちゃったわ。私を置いて……。あの子と二人きりでずつとやってきたのに」と死者の世界へ吸い込まれる。また次には「金まみれ」の男を乗せる。金を追い続けた男の孤独は、やはり死の世界へ向かう冷たさに浸されている。またある晩若い女性を乗せるが、彼女は結婚直前、横断歩道で自分を車から庇うため身代わりになって死んだ男を忘れられずに、冥界の境を彷徨っている。これらの「送り届け」は、冥界への道として意味深い意味を有していて、深い悲しみを湛えつつ、何か死への投身が感じられるところに独特の旋律が流れている。最後は、自分自身を乗せ、また死に別れた妻と子供を後ろの座席に乗せて車を発進させる。確かにこの世とあの世の境目を彷徨う魂は存在する。そこに深い詩情を重ねて死へ送り届けることによって深く奏でられる小説構造は、哀切な魅力となつて響いてくる。優秀作である。文章も飛躍性と詩性が兼ね備わっていて、筆者でなければ紡げない、一つのスタイルを獲得している。

また今号には、巻末に柴田耕平氏の「幕末えれじい 衝

鋒隊始末(1)」が載っている。これは幕末の幕府軍の連隊「衝鋒隊」の顛末を梶原雄之助という人物を軸に描いていく歴史小説だが、実によく詳細を叙述している。山岡鉄太郎から相撲の鉄砲や四股を習う導入から、フランス軍方式で兵としての教練を受ける場面、鳥羽伏見の戦いの顛末、江戸に戻ってきたからの連隊そのものの逃亡、陸軍総裁の勝海舟の対応とその後の江戸城開城への心理的影響など、微細にわたって展開している。一体どこからこのような資料を得ているのか、驚嘆するほどの細かく具体的な叙述である。これを読むと江戸城開城がまったたく別な面から浮かび上がってくる。筆者の資料収集力と粘り強い追求力、構成員には脱帽する。たまたま筆者の著書「幕臣たちの肖像」も手元に届き、それも併せ読むと、いっそう鮮やかに幕末の生きた世界が現代に蘇ってくる。勝海舟の遠謀深慮もあらためて追ってくるばかりでなく、明治維新そのもの

札幌文学

第91号



2021年8月

札幌文学会

も、別な様相を呈して立ち上がってくる。氏の業績はどこかで賞揚されるべき価値がある。胸に留めておきたい。

●「全作家」 (東京) 120号

全作家文学賞佳作の「鳥の名残」(漆原正雄)は不思議な味のある作品で、見えない鳥の気配がいつも自分のそばにいる設定が、おもしろい。こういう前提は、書きすぎると味や雰囲気が消されてしまつて、失敗する危うさがあるのだが、この作品はその距離をうまく保ちながら、一つの生きた存在をそこに動かしている。鳥の羽ばたきやそれが起こす風の動きが身近に、そして何か温かさを持って息づいている生命感がいい。はっきりわからないが、確かにそこにいるという温かい隣接感が、生身の癒しとして生動している。このおもしろい抽象感が漲っている。登場人物も、奇妙な抽象性を帯びて動いている。アパートの大家の「エリザさん」という変わった名の老婆も、主人公には見えないこの鳥が「見

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八賞正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文學界新人賞)・小浜清志(文學界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)

「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩	小説
1篇 A4用紙2枚以内 3000円	1篇 20枚まで 7000円
エッセイ	50枚まで 10000円
1篇 5枚以内 4000円	100枚まで 15000円
10枚以内 5000円	200枚まで 20000円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内書を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

bungeisc@asiawave.co.jp

える」と言う。また見えるかどうか診断を求めた町の動物医師も「見える」と言い、この鳥が妊娠していて、やがて「子を産む」と診断する。「卵」ではなく「子」だと言う。こうした周辺のわけのわからない抽象性が、ある体温を伴って温かく流れていくのがこの作品の魅力であり、作者の持ち味だろう。後半になって「名残」より「余り」だろうと認識を変化させているが、これは必要がなく、やや勇み足。また最後に老婆を登場させて書店の明かりを消すことで閉じているが、この結末をもっとインパクトがあるものにしていれば、作品の興行きが一気に広がっただろうと思われる。この「鳥の名残」に何を託すか、何の象徴なのか、筆者がどこまでそれを掴んでいるのかが、伝わってこないのが結末を弱くしている。この象徴的方法を自覚して駆使できるならば、筆者はもっとこの小説世界を大規模に動かすことができたはずである。これを書いた時点では、まだ掴み切っていないように想われる。これを示すラストに変えてくれれば、優秀作と見ることが出来る。「全作家」もいい筆者を見出ししているように思った。

●「八月の群れ」(兵庫県 73号)

今号は力作が揃っている。「あと恐ろし」(小柳きしえ)は、八〇枚に迫るボリュームで、中国へのビジネス進出の話を中心にダイナミックなストーリーが展開する。ここには中国の発展する社会が垣間見え、そこで働こうとする

ばれ学生結婚をして、性格の違う軋轢を抱えながら、因縁として生きていく過程を描いているが、男女の結びつきの隠れた負の部分照射しつつ、その重い成り行きを引き受けつつ人生を進んでいく一つの宿業は、浮かび上がってくる。性愛の逃れられない姿は書けているが、それから逃れる自由も示すことができれば、人生に向ける眼差しはもっとと深く示せたかもしれない。準優秀作。

葉山ほずみ氏の「暁の海」は、まだ武士の時代だろうか、村に捨てられた子供を主人公にしている。筆者の不遇な存在への視線はどこまでも温かく、食にも衣にもこと欠く哀れな子の生を見つめる目は希求に繋っている。村は天候不順のため飢饉に襲われ、それを救う神頼みに、ヤッコという主人公は生贄にされる。それから逃れ、最後に海に飛び込んで、海という大きな広がりの中に包まれていくストーリーだが、この物語構造の中には、葉山氏の不遇な存在への根本的な哲学が垣間見える。何も救いがないうち、せめて自然の懐に包まれ、帰帰することで、その運命の贖いを得るといふ最後の救いだ、ここへ行く前に、小説や物語としてはもつとできることがあるのではないだろうか。運命は、誠実で前向きなひたすらな生き方に向けて、ときとして微笑むことがある。それは、与えられた運命に身を投じることの中に劇的な展開を見せてそれまでを転換させる輝きを生じる。例えばこの子が身を投じた海で、通るか

八月の群れ

■小柳 きしえ / 野元 正 / 吉野 裕 / 伊東 貴之
 仲野 恒秀 / 松 良子 / 大森 康宏 / 葉山 ほずみ

Vol. 73 四十周年記念号

2021-10

新世界への挑戦が、小説を推進していく。それは結局中国人のしたたかなビジネス根性に跳ね返されるのだが、現場の生々しい策略の見え隠れに吸引力があり、その迫力に読者は引き込まれる。ここには確かに中国に進出していった日本人と日本企業の生の軌跡の一部が記されている。ただ、文学としてこれを見た場合、引き込まれるのは中国へビジネスを展開させるその進出に暴露される人間のやりとりであって、人間そのものへの掘削ではない。海外へのビジネスは描かれていても、人間の生きることへの洞察はなされていない。それは、この小説全体が、記憶を失いかけていくことへの防御としてあえて思い出そうとしている設定の弱さに起因する。この小説に、記憶を補強するためという前提は不要だろう。力が入っている。準優秀作。

野元正氏の「椰の葉」は、若い二人が椰の大樹の縁で結

かった台湾など外国の船に救われることも物語としてはあるだろう。龍宮という手もある。大地震から逃れることもあるかもしれない。不遇だからこそ、新たな運命にも恵まれる。そのほうが物語として豊かではないだろうか。根本的な哲学を示しておくのも悪くはない。しかし希望のカタルシスへの展開も、文学の可能性ではあるだろう。そのほうが葉山氏らしいとも言える。優秀作への大きな可能性を孕んだ準優秀作。

今季をまとめる。

優秀作

「夢で会いましょう」天野いずみ「朝」42号

「『よもつ耶』く更待月のこと」海邦智子「札幌文学」91号

「鳥の名残」▲ 漆原正雄「全作家」120号

推薦作

「法殺考」 波佐間義之「九州作家」134号

特別作

「幕末えれじい 衝鋒隊始末(1)」柴田耕平「札幌文学」91号

準優秀作

「あと恐ろし」 小柳きしえ「八月の群れ」73号

「椰の葉」 野元正

「暁の海」◎ 葉山ほずみ

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

今年から、全国同人雑誌協会の同人雑誌評の一翼を担うことになった。私は一五年間、群馬県高校生文学賞散文部門（主に小説）の選考委員を務めてきた。その間、全国高校文芸コンクールの小説部門の審査員も四年間担当した。年間約七〇篇、兼務している期間は、一二〇篇の高校生の書いた小説を読んできた。したがって会社で在職していた時期は、送られてきた同人誌は、必要に迫られたものしか読まなかった。

退職した今、積読状態の同人誌にツケを払う時が来たと思つた。それに考えてみれば、高校生の小説の読書体験を蓄積している私が、六十代以上の書き手がほとんどの同人誌の批評を担当するのも一興ではないかと思う。

今回「文芸思潮」に送られてきた、三〇誌と私の手元にある一〇誌を小説（連載小説を除く）中心に読んでいった。印象深い順に紹介する。

●「詩と真実」862号（熊本県）

「剝奪」（出 町子）主人公ルイは、結婚して二年経つ共働き夫婦。夕飯の支度をしながら、朝のための牛乳がないのに気づき、近所のコンビニに行く。そこで独身時代立ち読みしていた週刊誌が目にとまり、手に取って開いてみる。その巻頭のグラビアの写真に魅了され「思わずそのページを一枚破ってしまった」それからルイはそのスリリングな

行為を繰り返す。エモノは、ちぎって小箱にしまつておいた。ある日夫が、「中に何が入っているのだ」と聞いてきた。「なんでもないの」と笑つてごまかした。

「中のは自分がコンビニから盗んできたものだと言つたら、どんな顔をしたらうと考えた。その感じが悪くはないのだ。夫の知らない秘密が心地いいのだった。」こうして徐々に精神が壊れていくさまが描かれた不気味な小説だ。ルイの空虚感を埋める行為が、現代社会の危うさを警鐘しているようでもある。

●「季刊作家」95号（愛知県）

「母なるりんご」（津田一孝）主人公「私」の母は、戸籍上祖母で、祖母の娘が出産直後に亡くなったため、祖母に育てられたと聞いている。父については何も聞かされず、そのことに触れることはタブーのようだと子どもながらに感じてきた。「母が父親について話してくれないのは、話すことができないような人、例えば凶悪な犯罪者だからだろうか」という不安に「私」はさいなまれた。

「息子のためなら自分はどうなつても構わない」といった母だった。母が入院している病院から母危篤のファックスが職場に送られてきて、母の故郷にある病院を訪ねていく。しかし、母はすでに亡くなつていた。そこで会つた人々から自らの出生の秘密を探り出す。ミステリーのような展開で、事実が明らかになつていく。

●「あるかいど」70号（大阪府）

「卵を抱えて」（高原あふち）結婚して五年過ぎた三四歳の「私」の不妊治療のことが事細かに描いてあり、その辺の事情に疎い私は啓蒙された。夫のことを「津雲さん」と呼び、診察券には「緒方奈史」とあるので、夫婦別姓なのか？そこには触れられていない。不妊治療を始めた「私」に対し、姑は「仕事のつもりで通つてな」とプレッシャーをかける。「勝手なことを言うんじゃないよ、ここに通うために仕事を休み、迷惑をかける上に給料だって減るんだ。おまけに保険が適用されず、医療費の出費だつてバカにならない」と心の中で反発する。不妊の妻への心理的圧迫と偏見を克服していく過程が描かれている。

●「クレール」42号（群馬県）

「バンドリの毛皮帽子―サハリン断章」（中山茅集子）主人公アカリ（一〇歳）の視点で、一九三六年のサハリン（当時日本領樺太）が描かれている。世相は二・二六事件、阿部定事件が起つた年である。少女の目に映つた新興宗教団体の内部の様子やその弾圧、そしてサハリンでの厳しい自然と牧歌的な暮らしが、少女のみずみずしい感性によって、時を超えて当時に舞い降りたような印象を与えてくれる。

●「季刊午前」58号（福岡県）

「手袋とサボテン」（西田宣子）揺れるものに拒否反応を起す「私」は、「飛行機に乗れない。船旅なんてまっぴら。」

バスもだめ。エスカレーターは避けて階段を上る。」

「私」は、五歳の時に母を亡くし、小学四年の時、父を交通事故で亡くした。その後「伯母夫婦に引きとられた。それから伯母夫婦を父と母、従兄の光一を兄と呼んで生きてきた」現在は教員をしている兄との二人暮らし。その兄に恋人がいることを知り、動揺し混乱する。「この先、兄のいない部屋で私はどんなふうにも暮らしていけばいいのか。」そうして立ち直るまでの心理が描いてある。途中、井上靖の詩の引用はいらないと思う。

●「街道」38号（東京都）

「公園から見える夕日」（木下径子）わずか3ページの掌篇小说だが、適格な描写と無駄のない文章で、老いらくの恋がさわやかに描かれている。晩秋の公園を散歩する二人杖を突いて歩く諒子は、パンバスタグラスという「真っ白で」のびやかな房をたつぷりとそよがせた、遠くからも目に付く植物」が気に入る。「その白い大きな植物に抱きついて風に揺られたい」と思う。

「目の前の広い公園と白い大きなパンバスタグラスの見えるベンチに腰掛けて、夕暮れの曇り空をゆつたりと眺めている。」

隣に袖木が座っている。二人で人気の少ない公園に落ちて着いて座るのはめつたにないことで、ゆつたりと顔を見合わせていた」

もはや二人の関係は説明不要である。

●「ガランス」28号（福岡県）

「風の行方」（由比和子） 主人公麻子は五歳で養女に入った。「二人で育て上げた息子」が結婚して半年後、養親を四五年ぶりに訪ねていく。近所の老女に五年前義父は他界し、義母は入院していると聞く。洗濯物を病院に届けてくれと頼まれる。

学生時代、友人に「私、義母さんが五歳で亡くした子どもに代わりだったのよ。ずっと代わりだと苦しんできた」と心の内をぶちまけた。

「義母は突然現れた麻子に対し驚き、大きゅうなつてと場違いな言葉が発したものの、始終冷静であった。短大を出て就職して、一度も帰らず、実質、家出した麻子をとがめたりしなかった。むしろ思いがけない再会を喜んでいた」そのまま義母の世話を続け、幼なじみやかつての同級生の出現によって、鬱屈していたものが徐々に解放へと向かっていく。ただ説明的な文章が目につくので、最小限に抑えたほうがいい。

●「ふくやま文学」33号（広島県）

「すぎ間・トリップ」（花岡順子） 乳がんの定期検査の描写から始まる。五十代半ばの小城由香莉は医師から「左の胸に薄く影があるんですね」といわれる。高校の時の同級生と一緒に受け、受信後、温泉付きのリゾートホテルに

くれへんのや、戦争まだ終わってない、言うのが口癖やと奥さん言うよとった」

金村の不審の行動について級友にきくと「なに金村が互めくって何か取ってるって、絶対スズメのヒナや。あいつ、それ売って金儲けしてるらしいで」浩はかつてスズメを飼ったことがあり、ヒナを見せてくれと頼み、金村の自宅に行く。一匹二〇〇円や。けどお前やったら一五〇円、いや百円でええわ」

「なに言うてんのん、あげてやり」隣の部屋で病気で寝ている金村の母が言う。

「僕、もう帰るわ。絶対買うから一匹は置いとってよ」

こうした純な少年の目を通じて当時の風俗が描かれている。

●「港の灯」13号（兵庫県）

次は、ほっこりしたユーモアが漂う作品を二篇紹介する。「道楽」（加崎希和）は、「終戦間際に他界した囲碁好きだった父」の思い出から始まる。

「私」が小学三年生くらいの時、人力車で妾のところに行こうとする父に甘えて無理やり乗り込む。

「父は女の人をベニタマと呼んだ。」

「お父さん、ここ、お茶屋さん？ 置屋さん？」

「元々、父が初代・草起派・小唄の家元なのだ。お稽古の時間が来ても帰ってこない父に代わり、弟子に伯母が代稽古を就けているうちに、家元の座は伯母になり、父は大師

行き、そこで温泉に入ってランチを食べる予定だ。そこで接待ゴルフで来ている二人の営業マンと知りあい、由香莉が坂道で転ぶと助け起こし、氣遣ってくれた。

「夫の友広にも、息子たちにも気づかないなど何年もされたことなどない。なんなら、由香莉をお金のかからない家政婦くらいに思っているんじゃないかと思ってしまうことすらある。しかし、別だん、イヤだとか悲しいとか思っていない自分がある。めんどくさく考えることがめんどろになつている」これは現代社会の一つの象徴としての言葉になっている。

作者は、軽妙な会話と描写が持ち味なのだが、結末の八行では男たちとの情事が暗示されるが、これは一挙に通俗化してしまうので、入れないほうがよい。

●「あべの文学」30号（兵庫県）

「鉄塔の下」（高 琢基） 中学2年生田中浩の視点で朝鮮人の級友金村との友情が描かれている。年代は明らかではないが、一九五〇年代後半ではないかと思う。当時の朝鮮人の集落は、貧しさゆえ、あからさまな差別を受けていた。金村の家にどぶろくを買いに行った母に、金村の父は死んだと聞かされる。「ともかく南方で爆撃受けて右腕飛んで、耳も聞こえんようになってな、左手一本でリヤカー引いてクス屋しとったけど、酒の飲みすぎで肝硬変で死んだって。酒飲むと、日本人として兵隊行つてるのになんで障害年金

匠と呼ばれ、自由な身が気楽でいいと安穩としている。」

「あのお……、ベ・ニ・タ・マさんは、父のお弟子さんですか？」

「ベ・ニ・タ・マさんも、父の碁のお相手をなさるんですか」聞かたばにベニタマは「ホ、ホ、ホ」と笑い、父は「おそうだ」と繰り返す。現在とは対極的なのかな世界が心地よい。

「コロナの時代」（堀井邦子） タイトル通り、コロナウイルス禍での生活を描いている。「この際、家に居ようの模範生」となり、ネットフリックスに加入し、韓国ドラマ「愛の不時着」にはまってしまう。

「観る時間を生み出すことに今、全頭脳を使っている気がする。部屋に一人で住んでいるわけではない。せつない溢れんばかりの愛のドラマは独りで観るに限る」こうして、朝、夫と顔を合わすと「今日の予定は？」と聞き、夫のいる時間に行き、家事を手早くこなす。

「これからスリリングな愛の駆け引きが始まるその瞬間だったのに「ただいま」と靴を脱ぐ気配を感じ、慌てて停止ボタンを押したのだった。いいとこなのにと、舌打ちもしたはずだ。そんな気配を察してか、「あつ、そのままいいよ。観続けて気にしないで」と、物分かりのいい顔をすする。とんでもない。独りで観るからこそ妄想にどっぷりと浸かり、締め付けられるような心情に涙し、感情移入でき

るのに、相手の存在を意識すると、鼻をかみながら泣くことも出来ない。気が散り集中できない。分かっていないな、とかなり不快な顔で見上げた気がする。」

「かつぎこまれたベッドで呼吸器をつけたままの瀕死の姿が涙を誘う。蒼白の横顔が整いすぎて、美しすぎて、ただ魅入るだけ。気づいたら息を止めていた。胸が苦しいのはこのせいかな。手にしたお茶も冷え、思わず叫んでしまった。(死なないで)」

こうした場面、読んでいて思わず笑ってしまった。時にはこのような楽しい小説もいいものだ。ただ、こういう軽い感じの小説は、あまり漢字は多用せず、ひらがなを多用して、見た目もやわらかい印象を与えたほうがよい。

●「つくろ」27号(滋賀県)

「わけあって飼うことになりました」(耽羅沢 楮)

二〇〇九年頃のデパートの婦人服売場の課長の奮闘記である。不況で売り上げが低迷している中、犬との出会いによって、アイデアが浮かび、その案が採用され、ヒットして部長になる。しかし、時代はファストファッションやWeb通販が進出し、脅威になってきた。営業本部から来たMD推進部長と意見が対立し、早期退職に応募した。現在はアパレル倉庫で検品のアルバイトをしている。趣味で水彩画を始めて奇妙な犬と出会う。この二匹目のエピソードはいらなかったのではないかな。

しく説明してくれた。「パンチョッパリ」を初めて耳にした際も、いつものように聞いてみた。そうすると、いつもとは違い、何も言わないで急に私を抱きしめたのだった。」

そして次のように結んでいる。

「私は、『自分が何者か』に囚われずに生きていきたいと思っている。それが24歳となった私がいま考えていることである。」

●「追伸」10号(愛知県)

〈講演録〉「失われた命のために行動するということ―名古屋入管スリランカ人女性死亡事件と私」(平田雅己)「今年(二〇二二年)三月六日、名古屋市港区にある名古屋入管の収容施設内で、スリランカ国籍の三三歳の女性ウイシュマ・サンダマリさんが亡くなりました。私は三カ月後の六月三日、名古屋地方検察庁に対し名古屋入管関係者の刑事責任を求める告発状を郵送し受理されました。」

「肩書も組織も一切関係ありません。自分の生活圏で発生した悲劇に心を痛め、一人の人間として何ができるのか、思慮した上での単独行動でした。」

「私は基本的に根っからのめんどくさがりやで、まして人を訴えるなんて逆恨みされるかもしれないリスクをわざわざ負うなんてことはありませんそんな人間です。」

刑事告発は有権者であれば誰でもできます。私は今回告発を書面にしましたが、口頭でもいいですし、弁護士のカ

最後にいろいろ考えさせられたエッセイと講演録を紹介する。

●「架橋」34号(愛知県)

「24歳を迎え、私が今考えていること」(朴成柱)

「私は京都生まれ、韓国・ソウル育ちの(在日)三世である。日本で生まれ育つ一般的な(在日)とは少し違う経緯の持ち主といえるだろう。」

「一九九〇年代前半までは、韓国人が日本に行くためには、徹底的な反共教育を受けなければならなかった。」

「当時は、朝鮮籍の在日朝鮮人と韓国人の婚姻関係は法律上認められなかった」ため、「私」の両親は婚姻関係を結んだ夫婦ではなかった。

「今でも在日朝鮮人は『北のスパイ』と勘違いされたりする」といった記述に意外な気がした。私は民主化によって韓国はもつと規制の緩い国になっていっていると思っていた。

「私」は家の事情から七歳から約一五年間は韓国で暮らした。「父は朝鮮籍であるがゆえに年に一回しか韓国に来られなかった」小学生の時に同級生から「パンチョッパリ(半日本人という意味で、在日朝鮮人に対する差別用語)」と言われていじめられた。

「幼い頃の私は韓国語が出来なかったため、新しい単語を聞く度に、母にその意味を聞く癖があった。母はいつも優

ポートも必須ではありません。本当は私でなく他の誰かにやってほしかった。」

彼女が亡くなる約一カ月前に英語と日本語の両方で書かれた手紙。

「マノさんへ、私はぜんぜん大丈夫じゃないです。この二週間、大丈夫じゃないです。食べることも飲むことも出来ません。ぜんぶ体がしびれている。職員たちはストレスだといっています。彼らは私を病院につれていこうとしません。私は彼らに監禁されているからです。私は回復したい。でもどうやって? わかりません。どうか回復するために助けてください。私は食べなきゃいけないのに食べられない。すべての食べ物や水も吐いてしまう。どうしていいかわからない。いまずぐに私を助けてください。私はあなたに迷惑をかけたくない。でも、私は大丈夫じゃない。あなたに話すこともためらったけど、あなた以外に私の世話をしてくれるひとはいないから。 ウイシュマより」

理不尽なことを見聞きしたら声を上げなければいけない。なぜなら次には、私たちが理不尽な目にあわされることになるのだから。ここでは個人でも闘えることを教えてくれる。 「世界中のすべての権利法は闘い取られたものである。重要な法命題はすべて、まずこれに逆らうものから闘い取らねばならなかった。また、あらゆる権利法は、国民の

それも個人のそれも、いつでもそれを貫く用意があるという
うことを前提としている。権利法は、単なる思想ではな
く、生き生きとした力なのである。」(イエーリング著「権
利のための闘争」村上淳一訳/岩波文庫より)

今回の優秀作

- 「剥奪」 出 町子「詩と真実」 862号
- 「母なるりんご」 津田一孝「季刊作家」 95号
- 「卵を抱えて」 高原あふち「あるかいど」 70号
- 「バンドリの毛皮帽子―サハリン断章」 中山茅集子
「クレーン」 42号

準優秀作

- 「手袋とサボテン」 西田宣子「季刊午前」 58号
- 「公園から見える夕日」 木下怪子「街道」 38号
- 「風の行方」 由比和子「ガランス」 28号
- 「すき間・トリップ」 花岡順子「ふくやま文学」 33号

全国同人雑誌協会 〒158-0083 東京都世田谷区
奥沢 7-15-13 E-mail ZDK@asiawave.co.jp

同人雑誌最優秀作品「まほろば賞」への推薦のお願い
第16回「まほろば賞」への同人雑誌優秀作品の御推薦をお
願います。4月30日までに、全国同人雑誌協会「まほろ
ば賞推薦係」まで、郵送かメールで①作品タイトル②著者
名③掲載同人雑誌および号数④推薦者をお知らせくださ
い。お待ちしております。

全国同人雑誌協会

●「素粒」18号 (富山県)

この誌はしばらく見なかつた気がするが、富山の同人雑
誌の高いレベルをよく示している。同人は女性が多く、現
代をよく捉えて、新鮮な感じがするのも、特長であろう。
どの作品も、時代に対して敏感であり、しかもそれが追
求めるような捉え方でなく、自然な受容感のうちに表現
されている姿勢がいい。巻頭作「村上君と優のこと」(若
栗清子)は特にそれが顕著で、よく見れば現代として重要
なテーマをさりげなく、おもしろく浮かび上がらせている
手腕は、快いものがある。息子優の友達「村上君」がロシ
ア人二世で金髪白肌の異質な存在でありながら、それを乗
り越えて付き合っていく過程がたいへん明瞭にわかりやす
く描かれている。子供から少年への思春期に移っていく変
化も鮮やかに映し出され、その複雑な真理の中に、国境や
人種を乗り越える人間同士の深まりが実現していく姿は感
動を呼ぶ。特に村上君が金髪を黒髪に染めるのに対して、
自分も髪を金髪に染めるその行為が、周囲をも笑いで巻き
込んで偏見を打開させる叙述は説得性もあり、快哉を飛ば
したくなる爽快感がある。航空交通が発達し、日本の世界
への企業進出も戦前とは比較にならず圧倒的に広がってい
る趨勢の中で、異人種との国際結婚も増え、東京ではどこ

さらによりフィナーレとなっただろう。

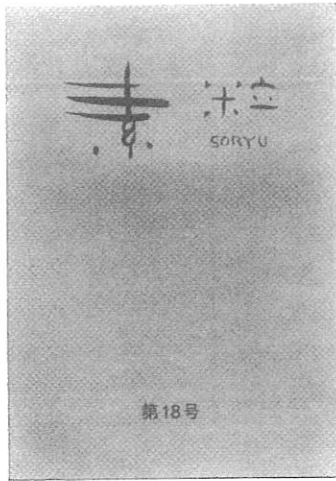
「場合」(萌木恵)はコロナ禍での鬱屈生活がよく書かれて
いて、介護ロボットも生き生きと可愛らしく描かれ、現代の
一面を活写している点は評価されるが、最後飲み屋で隣同士
でのグループ合コンによってうまく恋人ゲットというオチに
なるのは全体を浅くしている。準優秀作。

「三原色」(白川壮子)も着想はいい。ポナール展で、高校
時代のクラスメートのことを思い出し、彼女が高校時代市役
所勤めの男と心中未遂を起こしたことが蘇ってくるストー
リーだ。この作品は、「三原色」が小説のテーマにどう絡ん
でくるのかもわからないし、何より肝心の高校生の心中未遂
にしっかりと迫っていない。おもしろさを孕んだ、まだ書き始
めの状態というべきだろう。

●「風の道」16号 (東京都)

「風の道」は実力のある書き手が揃っている。どうい
う集団だろうかと興味をそそられる。特に読まされたのは、連載
を除いて「愛猫抄」(大森盛和)と「サイクロイド」(荻野史)
である。

「愛猫抄」は子供時代の体験を淡々と語りながら、猫と人
間、自分と動物の殺す現実が迫真力を持って浮かび上がって
くる。動物と共存しながらの日常世界が、実は生死を左右す
る苛酷な刃渡の上に成立している現実を見せつけられる。そ
の上に立っての猫飼いであり、愛猫である、生々しい迫力が

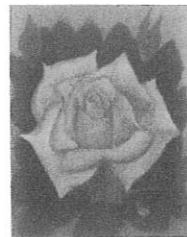


第18号

全国同人雑誌協会

風の道

16



風の道同人会

満ちている。これだけ一つのリアリズムを持って描ききる手腕に、感心した。この冷徹さによって、逆に猫や蛇たちが生き生きとし、その姿が読んだ者の中に鮮やかに残る。一種の生き物供養にもなっているところに、この作品の価値がある。ただ二つ疑問を覚えたところがある。五匹生まれた子猫のうち、四匹を写経までして川に流すのなら、どうして「猫をあげます」「もらってください」とポスターや貼り紙をして他の手段をとらなかったのか、私の家ではそうしてかなり醜い猫まですべてもらわれていったので、その点が苛酷であり、腑に落ちないこと、またそのあと、残った一匹の猫を「ふられた雄猫が食い殺しに来る」というのも解せない話に思われる。あまりそういう事実は聞かないし、この場合は四匹を捨てた筆者の行為を恐れて、手の届かないところへ一匹を隠したと見る方が自然ではないのか。しかしいずれにしても、よく書けた文章で、動物と人間の一つの姿が、胸に残る作品になっている。推薦作。

読者からのお便り



■82号感想

①亜細亜二千年紀 第一部・第七章

文学の言葉で表現されたものは、当然だが現実そのものではない。だが第七章で、ウォン・ユアンから語られた言葉は、現実と虚構の境界、その最も極を真率に射ってきた。しだいに重苦しい渦にのまれていく内容はもちろんだが、私は作者の手法に注視したい。慎ましくも母の愛情に育まれていた平穏な家庭が破壊されていく様、一個人の人生に影を落とす様相を淡々と語らせる。影響が及ぶ距離感や粗密さに、逆にリアルが立体的に存在してくる。ここに、歴史を背負う小説本来の姿があると感悟した。

また、簡潔ながらも具体的な描写が写実的印象を強く残した。風土や気候、高床式家屋、大切にしていた機械織り機……訪ねたことのない私に、カンボジアの空や風の匂い、日常生活の髪を丁寧に扱ってくれた。

いずれも、五十嵐氏の筆力以外の何ものでもないのだが、もっとも脳裏に刻まれたのは、登場人物それぞれが放つ眼の表情だった。もちろん、作者は全てを描写しない。だが、どのページからもそれを感じることができ、訴えかけてくる。研ぎ澄まされていくユアンの虹彩。お祭りで乗った象の眼の黒さ。母の優しさで怒りや絶望の眼差し。父からは戦闘的かつ先鋭的な眼の光。さらには、ユアンの言葉に耳を傾ける敦志の黙した眼も交錯し、作品に濃淡ある影が挿れあって落ちていた。

私にとって第七章は、ストーリー展開よりも作者の筆力が超えてきた。こういった巧みさを提示されると、素人の書き手は憧れずにはいられない。作品に対する作者の表意以外にも、読むという行為の感興はより密度を増していく。壮大なスケールで大きく時代をめぐって行くこの小説を、次号も心待ちにしている。

②小説稼業事始め

第一回全国同人雑誌協会総会の模様を、紙面において興味深く見

「サイクロイド」はタイトルがおもしろい。小説に行き幾何学模様の言葉を用いたのを初めて見た。それはけっして奇を衒っているのではなく、小説の内容にマッチした不思議な趣を有している。随筆風にあちらこちら人生を振り返りながら、一つの形をジグソーパズルの趣で嵌め込み、硬くならないある飄逸さを持って、障害児を育てる人生観に、独特の洒脱がある。小説はこういうおもしろさを表現できるのかともあらためて認識させられる。運命はサイクロイドの軌跡に似ている。その美しい軌跡によって辻褃が合い、楽しい曲線となる、というおおらかな宿命感や諦念が踊っているようで、この受け入れ方の朗らかさに、サイクロイドの曲線の美しさがあらためて浮かび上がってくる。おもしろい発想であり、楽しい新鮮な着想である。最後がやや物足りないが、あえて優秀作としたい。

優秀作

「村上君と優のこと」若栗清子「素粒」18号

「サイクロイド」荻野央「風の道」16号

推薦作

「愛猫抄」大森盛和「風の道」16号

準優秀作

「場合」(萌木恵)「素粒」18号

学させていただいた。全国の書き手たちとプロの作家たちの融合は、同人雑誌というステージにおいて、多角度から向けられた真摯な志と情熱がひとすじのベクトルを創出していった。

その流れを汲んだ赤川氏の講演には、プロとして携えるべき意識と気概が点在しており、首肯される言葉と多々出会えたのは幸運だった。氏は、小説というジャンルを主として語られたが、これは随筆、詩歌など他の分野に置換しても活きる言葉と受けとめた。特に、「登場人物を愛しなさい」は心から納得できた。これは、対象とするものに対し深く温かな眼差しを注ぎ自分の内腑でじっくり育むこと——と、私は勝手に理解させてもらった。いずれも心構えとしての享受にほかならない。氏が、謙虚さを失わずプロとしての誇りを持久してきた証がこの紙面に凝縮されていた。

③百期百会 第二部・朱夏篇

毎回、この連載を愉しみにしている。理由は幾つかあるが、昭和育ちの私としては描かれる時代背景を、懐かしい匂いとして感覚的に受けとめられることが最大の要因に思う。著名な方々が岳氏を軸に繋がっていく綾は、昭和から平成への時代の流れをも織り込んだ独自の模様を広げてくれる。自己回顧録風だが、出会った人に対する思いを秘めた手紙のようにも感じている。今号では岳氏が引いた坂上氏のエッセイに書き方の学びがあり、長いこと忘れていた笹倉明という名をふいに甦らせてくれた喜びもあった。

◇全体を通して

各賞においての選評を欠かさず熟読している。選考委員の方々の客観的な視点、着目点は気づきの宝庫である。自分の読み方との相違点、盲点が必ず存在する。すべてを受け入れる必須性はないだろうが、他者の見解を融通無碍に受けとめる柔軟性を忘れてはいけないと、思えるのが選評のページの良さでもある。今号は、三部門の賞の他に全国同人雑誌評も加味されており、学びの場が多い印象が強かった。

(北海道札幌市/中村郁恵)

■全国の「同人雑誌」を読む

いよいよ、これから、全国の「同人雑誌」を読むことをはじめよう。「文芸思潮」の「同人雑誌評」を書くためである。私は、この仕事を依頼されたから引き受けたわけではない。私は、自分から、「やりたい」と思ったから、引き受けたのである。《思考力の衰え》や《思想の枯渇》を感じはじめると、私は「小説を読む」。小説には《答え》がない。《答え》は自力で探し出すしかない。《答え》を見いだせず、悪戦苦闘することこそ小説であり、小説を書いたり読んだりすることこそ、思考や思想の原点である。もっともらしく、目先の政治問題や経済問題、あるいは社会問題を、さも《大問題》でもあるごとく、熱く語り、熱く論じることは、私に言わせれば、《思考停止》以外のなにものでもない。「思考力を鍛える」とか「思考力は、こうすれば伸びる」とか、あるいは「国際情勢がよくわかる本」「現代思想入門」とかいった類のハウツー本を、私は読まない。そんな安直な駄本ばかり読んでいるから思考力は衰え、思想は枯渇するのだ、と私は思っている。私は、逆に「思考力を鍛える」ために小説を読む。たとえば、ドストエフ

や政治評論家などの書くものとは違う。「これから政治評論のようなものを止めて、漱石論に戻ります……。」というようなことを話してくれたことがあったが、今、あらためて、そのことを痛感した。その時、私も、あらためて「小説を読むこと」からはじめようと思った。小説を書くことも、小説を読むことも、そして仲間たちの原稿を集めて、自分たちの同人雑誌を、身銭をきって発行することも、私には、いわくいがたい「崇高な行為」のように思える。繰り返すが、小説には《答え》がない。小説を書く人も小説を読む人も、《答え》を探さなければならぬ。そのプロセスが小説である。他人の言動を非難し、お説教を繰り返すようなエッセイや評論や雑文の類いとは、そこが決定的に違う。

さて、同人雑誌を読むことにしよう。同人雑誌に書いている作家たちは、高齢者が多いようだ。私も「高齢者」の一人だが、昨今の「老人問題」は年齢の問題だけではないように見受けられる。現代の老人問題は、孤独な人間存在と直接的に向き合うという実存的問題のように見える。

●「文芸中部」(愛知県) 117号

「たった一人の孤独」(堀井清)が、もともと面白かった。この小説は、老人の孤独を描いているように見えるが、私には、人間存在そのものの孤独、つまり《実存》を描いているように読めた。八五歳の老人が、紆余曲折の挙句、

スキーマの「罪と罰」。小説が読めなくなったら、その時が、おそらく、私のオシマイ(思考停止)の時だろう、と思う。さて、小説ならなんでもいいというわけではない。私は最近、商業文芸誌「文學界」「新潮」「すばる」「文藝」などに掲載されている小説を読むことをやめた。芥川賞や直木賞の受賞作品もほとんど読まない。「なんのために書くのか」「何故、書くのか」「これを書いておかないと死ぬに死ねない」という《文学性》も《作家性》も、それらの作品からは感じられないからだ。私は、上手な小説より、心を撃つ小説を読みたい。だから同人雑誌の小説を読むことにしたというわけだ。それほど期待していなかったが、同人誌の小説は予想外に面白い。というより期待した通りに面白い。そこには、《人間の探求》がある。私は、若い頃、商業文芸誌の新人賞応募原稿の「下読み」というものをやったことがあるが、その時は、大量の応募原稿の小説を読むことが、ただひたすら苦痛であったが、それは、夢中になって読み耽るといふような小説に出会わなかったからである。同人雑誌の小説を読むことは苦痛ではなかった。むしろ、逆だった。私は高校時代、小説を読みはじめた時に感じたのと同じような「小説を読む喜び」を感じた。私が尊敬する文芸評論家の江藤淳氏は、私のインタビューに対して、「小説を読むことで読解力を鍛える」とか、「私の政治評論は、文芸評論家の書く政治評論だ。だから新聞記者

最後に流れ着いた場末のボロアパートに住んでいる。彼は、人生の目的も生きがいもない。ただ生きているだけだ。ただ、意味もなく、目的もなく、「生きる」とは何か」を追求していく。こういう文章がある。

《外に出ようと不意に思う。人生に目標などない。人間にはきつと始めから人生の意味も目標もないのだ。人が苦しむのは、人生に意味がないからである。意味がないのであればその意味を自分で探さなければならない、困ったことだ。困った、困った、というのがこのところの自分の口癖になっている。》

しかし、この小説が面白いのは、こういう認識(哲学)の元に、「八五歳の老人の孤独」な日常生活を具体的に描いていることだ。時々、声をかけて外出するアパートの隣人も孤独な老人だ。妻との離婚、娘の家出……。定食屋の女性、町内会長……。隣室の老人の部屋には若い女性が入り入っていたが、その女性に裏切られて、その老人(今野)は意気消沈している。

《今野雄二はうまそうにコーヒを飲んだ。けれど、俺にとってはたったひとりの知人だった彼女に裏切られて、本当のひとりになった。そういつて今度は太いため息をついた。目の前に俺がいるじゃないか、俺はあんたの知人でも友人でもないのか、と自分はいった。今野は、そうだね、といつていつまでも自分の顔を見ているのだった。》

この終わり方も、なかなかいい。

●「組香」(大阪府) 5号

「大阪文学学校」の出身者たちが運営している同人雑誌らしい。この同人雑誌は、なかなか充実した雑誌だが、私が注目したのは、もともと素材で、もともと平凡な印象の「湯けむりの街」(新谷翔)という作品だった。タイトルからして地味で、ありふれた凡庸な小説だろうと思いがながら、読んでみた。読んでいくうちに、次第に小説の世界へ引きずりこまれていった。不思議な魅力のある小説だった。大阪で新聞記者をしているらしい主人公が、大学時代を過ごした大分県別府を再訪する物語。別府の温泉街を舞台にしている。主人公は、大学に入学したばかりの学生で、温泉旅館で「賄い」のアルバイトをしていた。その時、同じ旅館で「仲居」のバイトをしていて、知りあったのが「優子」。その優子という女性を訪ねていく小説。優子が別府港で出迎えてくれる。しかし、目当ての女性は優子ではない。優子の高校時代の友人で、カフェで働いている「清美」だ。花火大会の夜、偶然、遭遇し、優子に紹介されたのが「清美」だった。これもまた偶然の行きがかりで、その夜、主人公は、清美と一夜を過ごす。しかし、清美には、病的なところがあり、精神状態が不安定。自殺願望があり、自傷行為を繰り返す。主人公は、自分を愛してくれ、その上、自分に全面的に依存してくる清美を見捨てるのが出来ない。



い。将来の目標もない主人公に、清美が、「新聞記者になったら……」とすすめる。それが、主人公が、新聞記者になっただきかけだった。その後も自傷行為を繰り返す清美とは、何回も別れようとするが、その度にヨリを戻す。ある日、清美の父親が訪ねてくる。「娘をよろしくお願ひします」と。しかし、清美は、鉄道自殺し帰らぬ人となる。主人公は、はじめて、清美の「墓参り」をするために、別府を訪れたのであった。この小説は、ストーリーもテーマも平凡でステレオタイプだが、激しく胸をうつものがある。私は、最後まで、一気に読んでしまった。何が、そうさせるのか。あらためて、「小説とは何か」を考えてみたい。

●「ふくやま文学」(広島県) 33号

もう一つ、印象に残った作品があった。岡野初枝「私は捨てた」。そろそろ死を自覚し始めた初老の女性が、墓の問題で悩む小説である。

「墓」や「墓地」や「遺骨」……というような問題もまた、人間にとって普遍的な問題である。《死》が普遍的であるように。あらゆる人種、民族に、この問題は、ある。墓と無縁な人はおそらくいない。大学進学を機に、家族や故郷と離れて、県外の高知県に住みつくことになった「私」は、兄に、「家族も故郷も捨てた」と思われている。久しぶりに帰省し、墓参りをしている時。

《家を捨てて出てから、振り返りもしなかった者が、我が家の墓に入ろうとは思わないでくれ。せめて遺灰だけは、高知に海へ撒いてやるから、それだけでありがたいと思え》。冷たい言葉を背中を浴びせかけられて、固まってしまった私は、声も出さないうで震えていた。

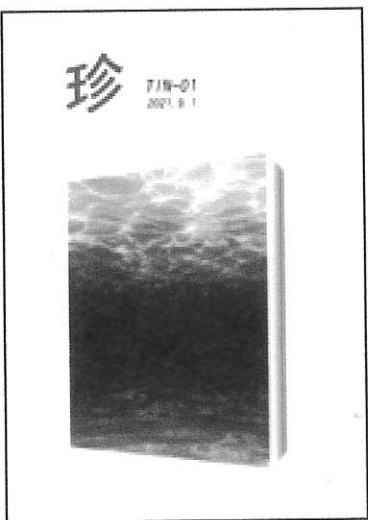
私は、この一節にギクリとする。触れてはいけない問題に触れた時のように。

おそらく大学を卒業し、その地で就職し、いつの間にか自分自身も、年老いて、両親や兄弟や故郷を懐かしく思い始めたのだろう。そういう時、この兄の言葉は、きつい。しかし、ある種の真実ではある。避けて通ることは出来ない。その兄も、「私」よりも先に死んでしまう。

●「珍」(高知県) 創刊号

珍しいタイトルのこの雑誌も素晴らしい。高知県で、新しく創刊された同人誌らしい。薄い雑誌だが、同人たちの創作に対する熱気が伝わってくる。

【徒・花】(塩崎あまひ)。【VUCA プーカ】(山本弥穂)。【散歩】(西村雅人)。【名前のないひち】(冬由野森)。



これらの各編を、私は、半ば感動しつつ読んだ。描写がしっかりしているから、通俗的なところが無い。特に「散歩」は、老人が、ただ散歩するだけの小説だが、街や風景、建物、庭……などの細かい描写の積み重ねのあけく、かすかに漏れ出てくる「小さな物語」がいい。大文字の言葉(戦争、政治、コロナ)や大きな物語が巷に氾濫し、一般庶民までが大言壮語する時代に、こういう細かい描写中心の小説を読むことは、一服の清涼剤になる。

●「弦」(愛知県) 110号

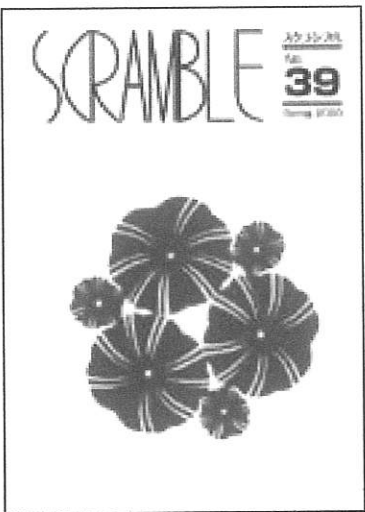
「弦」もレベルの高い雑誌だ。冒頭に掲載された「ドラゴンの卵」(長沼宏之)もいいが、私は、どちらかと言うと、「森のカフェ」(木戸順子)、「宵待ち」(小森由美)、「あ

ん餅ぞうに」(國方学)の方が、いい小説だと思った。それぞれ、《死》と向き合った小説で、話が抽象的ではなく、具体的なのが素晴らしい。小説も思想も哲学も、《具体性》というものが命だ。抽象的、観念的な表現ではなく、具体的、個別的表現が、思考力や読解力を鍛える。

「森のカフェ」は、「全く心当たりのない女性からの電話で、母の死を知った。あまりにも唐突で半信半疑だったが、よどみなく母の名前、住所、電話番号を時折涙声になりながら伝える野島加代という人が嘘をついているとは思えなかった。」という衝撃的な文章で始まる。主人公の「私」は、一人息子で、独身。母とは遠く離れて暮らしている。早くに父は交通事故で死に、母は保育園で働いていた。母の不倫相手のことで、母子は疎遠になっていく。母は、その後、うつ病になり、保育園も退職し、山奥の村に家建て、そこで、一人で、老後を過ごしていた。

「冷蔵庫の扉に、あなたの名前と電話番号が書いてある紙がマグネットで留めてあります。一人息子だから何かあったら頼むねと、いつも言われていました」

「私」は、あわてて母が住んでいたという山奥の村へ。そこで、死んだ母と再会し、村の友人たちに助けられながら葬式を終える。母の残した日記をめくりながら、村の友人たちに囲まれた、最後の母のささやかな「幸せ」に思いを寄せる。村を去る日、最後に立ち寄った「森のカフェ」



があった。一緒に新聞社を受験したこと。同じ地方新聞社の年上の女性記者を、ともに知っていること。実は、主人公は、地元の大学生時代、水泳部で、大学のプールでの小学生溺死事件に、当事者として遭遇する。その取材にやってきたやり手の女性記者と取材対象の主人公は、取材を受けているうちに、女性記者主導で、次第に親密な関係になっていく。「一緒に新聞社で働こうよ」という女性記者に誘われるように、新聞社を受験する。同じ受験会場に現れたのが、W大学に進学していた野原だった。野原は合格したが、主人公は、最終面接まで行くが不合格となる。主人公は、女性記者と別れて東京へ。しかし、遠距離恋愛のよくなものは、細々と続く。女性記者には結婚話が持ち上がっている。ある日、上野の山の上の主人公の下宿に、突然、訪ねて来て、「今夜、結婚しよう」と。二人は結ばれるが、

に、母の作ったタバストリーが掛かっていた。

●「SCRAMBLE」(愛媛県) 39号

青春小説や恋愛小説は嫌いではない。しかし、通俗的、ステレオタイプの甘ったれた青春小説や恋愛小説ほど、不愉快で、気持ちの悪いものはない。そういう小説や映像が目にはいると、激しい怒りがこみ上げてくる。逆に私は、今でも、「伊豆の踊子」や「野菊の墓」「ピノキオ」「トムソーヤの冒険」「赤毛のアン」「アルプスの少女ハイジ」などを、大真面目に読んだり見たりして、涙ぐむ。こういう小説がある限り、何事があるうと、私は、生きていけそうな気がする。

「青春の風景」(白井靖之)という小説は、タイトルからしてステレオタイプの「通俗小説」を連想しそうだ。読んでみたら、そうではなかった。確かに、技術的には、文体系もストーリー展開も上手とは言えないだろうが、しかし、私は、何故か、感動してしまった。私の小説を読む時の原理原則の第一網目は「上手な小説より感動させる小説を」というものだ。まさに、そういう小説だった。愛媛県松山市の道後温泉のホテル(旅館)の前で、二人の高校時代の同級生が、偶然に再会するところから始まる。東京に出て、サラリーマン生活を送った主人公(岩井)と、故郷の新聞社に就職し、社長までのほりつめたという噂の野原親友というわけではなかったが、二人の間には共通の話題

その男性まさりの辣腕女性記者は、なんと処女だった。しかし、女性記者は、癌で、あつけなく死んでしまう……。主人公は、墓参りのために帰郷し、そこで、偶然に同級生に遭遇したという話だ。では、私は、この小説の《何》に感動したのだろう。それは、おそらく、真摯に《自分自身》と向き合う姿勢に、であろう。吉本隆明は、詩や小説が成功するためには《自己を偽らぬこと》をあげていた。私は、この小説の題材が、フィクションなのか、事実に近い体験をもとにしたものなのか知らない。いずれにしろ、人に《感動》を与える小説は素晴らしいと思う。

最後に埴谷雄高の言葉を引用しておこう。私自身への《いましめ》でもある。

《私は、作品は、容易に表現しがたい果てもない困難に向ってただひたすら努力することだけであって、その結果がほめられようと非難されようと黙殺されようと仕方のない種類の仕事に属すると思っている。》(「蓮と海嘯」)

優秀作推薦

- 「森のカフェ」木戸順子(「弦」110号)
- 「たった一人の孤独」堀井清(「文芸中部」117号)
- 「青春の風景」白井靖之(「SCRAMBLE」39号)
- 「湯けむりの街」新谷翔(「組香」5号)

殿芝千恵

●「クレイン」(群馬県) 41号

様々な雰囲気作家陣が揃っていて、読んでいて飽きない。中でも、「とげ唄——西山富子の場合」(糟屋和美)は目を引く。西山富子は公務員を定年退職し、残された九十歳の父を引き取るが、彼は「手のかからない老人だった」。父と富子の間には穏やかな時間が流れ、老衰による自然死で父を見送る。ここまでの描写が、後の「夫の介護」と対比されていて面白い。簡潔な表現が読者に対して親切だ。父と対照的に夫は幻視、幻聴を伴い大声で騒ぎ、暴食し、不機嫌で暴れまわる。更に「男が俺に向かって嘲けりの歌を囁く」と怯える。富子は夫を精神病院に連れていき、ここでタイトルの「とげ唄」の背景が明らかになる。夫の兄は帰還兵で、そのPTSDに悩まされ、当時の悪習として座敷牢で生涯を終えたのだが、少年だった夫の脳裏に刻まれた哀切な唄こそが「とげ唄」であった。父と夫、二人分の「老いの終末」を見送った富子の様々な心情表現の後ろで、効果的に「とげ唄」が見え隠れする描写はたいへん巧みで読み応えがあった。

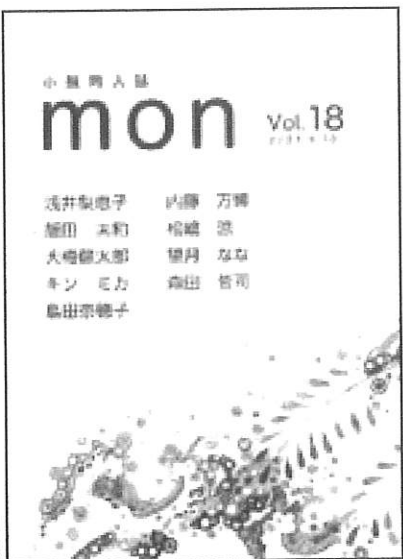
「人間と悪魔」(水丘曜一)も軽妙で愉快。ただ、思い切

だろう。「焦る体力すら残っていない古い」の乾いた悲しさど諦観を押し出して欲しかった。あと、基本的なことだが落ちてしまった場所の説明が不明瞭。どんな場所かで彼が喘いでいるのかわからず、最後までもどかしい思いが拭えなかった。

前述の「隣人たちの道」(木戸岳彦)は途中まではそれこそ手に汗握る気持ちだった。リカルドがもつと腹黒く欲深く、自治体や昭夫の愛娘を貪るさまを読みたかった。主人公の歪んだ妄執に全て沈み込んでおしまい、というのは広げ過ぎた風呂敷を急いで畳んだか。もつと長く、それこそ連載の形をとって書ける題材だと思う。

●「mon」(大阪府) 18号

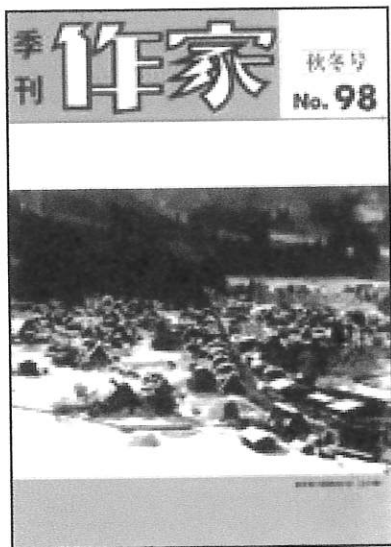
レベルの高い作品が揃っており、この同人誌の主力作品



つてもっと短くまとめた方が一気呵成に読者を惹きつけて、倫理観を気持ちよく裏切るリズムを感じさせられたのではないか。神父の存在の伏線回収はお見事。

●「季刊作家」(愛知県) 98号

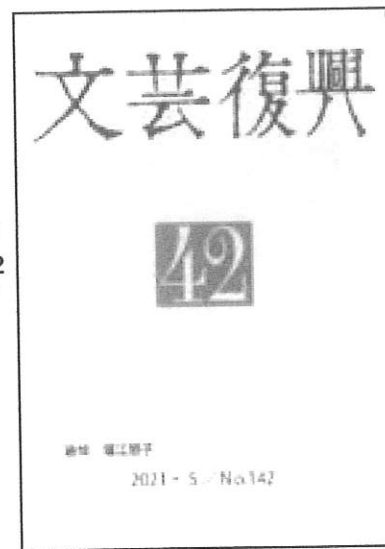
今回たまたまなのか世界観の似た作品が重なり、読み疲れしてしまった。現実と精神世界が交錯する構成で攻めてくる「Ella Moll」(鈴木友範)、「隣人たちの道」(木戸岳彦)の二作品がそうだ。単体で見れば秀作なのだが互いの魅力を相殺してしまったのが惜しい。その中で異彩を放ったのが「よもぎとクローバー、そしてヤスデ」(富岡秀雄)。密室パニックものに分類されるだろうが、飢え・渇き・極小空間での排泄の不快感などがたいへん嫌な感じに描写されているのが出色の出来だ。ただ、主人公の精神的な緊迫感や焦燥感の描写が淡泊すぎ、人によっては消化不良に思う



群が持つ共通の魅力がいかなく発揮されていた。彼らの作品に触れると、伏線回収の妙技が散りばめられた複層的な構成と視点により社会情勢についていつしか読者は学ばせられ、その隙間で置き去りにされてしまった人たちのやるせない心の残滓について深く思考せざるを得ない。しかもそれが押しつけがましくなく、読後には登場人物それぞれの生涯のひとふしに沿って思い出を体験したようなごく自然な共感を残してゆくのがたいへん快い。特に印象深かったのは「運ぶ人」(内藤万博)、「溺れる亀」(飯田未和)の二作品だ。

「運ぶ人」(内藤万博)は昨今注目を集めているフードデリバリーの内情について詳しく調べてあるが、単に情報を羅列するのではなく、もう活字ではその心情を知ることが難しくなった若年層の生活と経済とが臨場感を持つて迫ってくる。ただ、非正規、完全歩合給の配達員と社会保障に守られた大学教授の社会的立場の対比はわかりやすすぎる。近似値の二者の間にある格差の方が救いような感じが際立つように思う。

「溺れる亀」(飯田未和)は、傷つけられる側の立場や心情のバリエーションが思いもかけない展開を見せてかなり読み応えがあった。被害者というのは客観ではなく主観で決定されるものだという点を改めて認識させられる作品である。



●「文芸復興」(東京都) 142号

完成度の高い作品群が詰まった一冊である。同人誌を読むと、やはり似たような雰囲気のある文体・ジャンルが揃ってしまいがちだが、ここに関してはそうではなかった。各々が得意とする分野で綿密な下調べがあることを思わせる丁寧な構成がなされている。金融や教育界、歴史上の人物や風俗についての豊富な知識が読者の好奇心を程よくくすぐって飽きさせない。特にその手法が巧みなのが「『渡と袈裟』に衣川」(森下征二)だろう。

まだ十代の文覚が従兄弟・渡の妻である袈裟に横恋慕し、その母の衣川を脅して無理に関係を持った。ここまではよくある戦国不倫のだが、この後の顛末として間男の盛遠(文覚の出家前の俗名)と人妻の袈裟が共謀して夫の渡殺



届きそうな身内の女の垣間見せるエロスも、おふろという舞台さえあれば罪悪感はいさっぱり流されていく。心地よさに長風呂しすぎた主人公の最後の壊れっぷりも見事。若手が寄稿したとは思われない昭和風味満載の「引退」

(森夢次)も面白かった。ただ、闘う氣力を失くした親父さんが包んでよこした金の意味をもっと考えて欲しい所だ。無血引退の会場として選ばれてしまった、という疑念がなぜわいてこないのか非常に不自然。それともこれは読者に託された視点なのか。昭和任侠の甘い所だけでなく苦い所も描いて欲しい。「やっぱりね」という続編を期待する。

●「海馬」(兵庫県) 44号

作品数は三編と非常に少ないが、完成度は高い。特に「葛藤」(山下定雄)は連作らしいが、今回の作品も独立した

害を企てるも、計画は頓挫して手違いから袈裟が命を落とす。この後の男女三人の心象風景を各々の一人称で語らせている。隠れた真実を事実の裏から無理やり引っ張り出してさらけ出そうとするやり方は名作映画「藪の中」を彷彿とさせて大変面白い。ただ、すべての謎を明かせる立場の袈裟が死人に口なし状態なのが惜しい。チョイ役登場していた陰陽師に反魂術でも使って真相を語らせて欲しいかった。「悪夢のてんまつ」(丸山修身)も主人公のイライラがよく伝わってきて秀逸。読者の立場で続編が気になる、というのは負けた気がして少し悔しい。

●「全作家」(東京都) 117号

「お楽しみ小説」の色合いが濃い。というのも、上手いツートップが適度にエロスを放り込んでいるからだ。「惠春の焦がれ火」(井上岳人)などは、慧春尼の存在を全く知らなくても妄想をたくましくして楽しめる。ただ、逆に知っている読者からすると、あまりにも伝聞の資料に忠実に過ぎて物足りなさが残っているのも事実。妄想を楽しむという点においては読者の自己責任に頼り過ぎに思う。もっと作者の妄想も散りばめて貰いたいものだ。

個人的には「おふろ物語」(崎村裕)を推したい。きちんと読み込めば横溝チックな閉鎖的かつ女性蔑視の匂いを嗅ぎあてられるが、そのようなまともな倫理観はすべておふろのむうとした生あたたかい湿気に消えてしまう。手の

短編として十分通用する仕上がりがだ。最初は鍵括弧を一切使わない地の文だけで構成されたような書き方に読者は面食らうが、読み進むにつれこれは実際には発声された言葉なのか、それとも心中の自問自答なのか、更に作者が設定した発話者の真偽さえ疑わしくなり、独自の世界観に惑乱されてゆく快感がある。終盤で薄く狂気を感じさせ、そこに身を委ねてしまいたくもなりながら現実の生活が辛うじて人を踏みとどまらせる情なさ、奇妙に読者を惹きつける。「クマネズミと亡霊」(永田祐司)は後半の三島由紀夫出現あたりからやや説教臭いのが気になる。でもこの鬱陶しい正義感が主人公たる管理人の持ち味なのでもっと煮詰めてもらいたい。シャボン玉クレーマーの男の存在を掘り下げてみれば、管理人の思考の円周上に存在するのが分かる。前半部分のクマネズミ駆除についての奮闘ぶりはわかりやすく面白い。が、管理会社の担当者に駆除の初期設定を誤ったことを隠そうとする心理をもっと利用して焦燥感や緊迫感を演出できればよかった。そうすれば、後半の説教臭さも追い詰められた初老の男性の己の正しさをよすがに暴走する哀しい言い訳として読者の心情に強く印象付けられる。

優秀作推薦

「葛藤」山下定雄 (「海馬」44号)

森村和子

●「メタセコイア」(大阪府) 18号

「帰ったら、カレーにしよう」(春野のはら)は秀逸。主人公高橋真琴は中学受験して滑り止めに進学した高校を二年で中退、ひきこもりとなった。母からは「恥さらし」と呼ばれていたが、父は成人式のスーツを仕立ててくれ、間もなく病死した。三十三歳で姉の都合で家から追い出され、すぐ金を使い果たし、ある家に盗みに入る。そこで主人のおばさんに息子、亮と間違われた。似てもないのに強弁して、これ幸いに息子になりすまして居候となる。これをきっかけとして、なりすまし亮の人生が回り出す。まず、隣人の日置幸子が倒れ、救急車で病院に運ばれて亡くなる。幸子の娘は息子の少年日置コナンを置き去りにして消える。おばさんのパート先のコンビニが人手不足なのでとりあえず雇われ、少年コナンをほっとけず里親となる。姉の夫の弁護士や幸子の息子など、表面上きちんと社会生活をしている人の冷たさに比べ、亮の周囲の人々の人の好き、いい加減さ、面倒見の良さが、ドタバタしながら軽妙に描かれて物語は展開する。亮へのありえないなりすましを手始めに、ひきこもり、ホームレス、人手不足、育児放棄、無

戸籍などを盛り込みながら深刻にならずユーモラスに手際よく処理して無理がない。落ちこぼれだった主人公がコナンと生活しながら成長、結婚しコナンとともに生きていく。タイトルの「帰ったら、カレーにしよう」は観音節分に祭に三人とおばさんがともに出かけた折、ネグレクトの結果、異常に偏食のコナンが唯一食べられるカレーを夕食にしようという、ほのぼのとした結末による。

●「あかね」(鹿児島県) 120号

編集室は鹿児島市である。内容は随筆、俳句、短歌、川柳、さつま狂句(歌詞は方言)、創作小説、ミステリー小説と幅広い。編集は手間のかかったもので、挿絵、カラー写真まであり、読みやすく整理されている。青香チエの創作「ジ・エンド(最終回)」では、文章の一部について書体を変える工夫までしている。

四本タエコの随筆「四十九歳の死」の中で、鹿児島で暮らした孤高の歌人浜田到に触れている。特別寄稿/上村直己による「七高造士館の独語教師たち(19)」ではエルンスト・ブツチエルという最後の独人教師を紹介している。

柳瀬良行の連載ずいひつは「焼酎物語五・六」である。鹿児島らしい地方色豊かな文章が並んだ。連載ずいひつ「落人の里(一)」を書いている東なや子が九十六歳には驚嘆した。要録たる文章である。

本の末尾には文章研究として、前号119号の作品批評が載

り、会員同士の和やかな交流が見える。

「友」を課題としたずいひつが九作品あったが、すべて「友」を肯定的にとらえている。裏目に出る、失敗、裏切りなど負の面に着目した作品もあれば、より深く考えることができたであろう。

●「狐火」(埼玉県) 25号

「家の履歴」(山之内朗子)も秀作。この作品は戦後十年目に結婚してから六年間の新米主婦の生活をいきいきと描いたものである。近所の主婦と交流しながら、誰にとっても思い当たるような小さな出来事を、無駄のない文章が気持ちよく綴っていく。短いが心に残る作品である。

戦後十年目、住宅不足の時代に抽選で川崎市の新しい市営住宅に結婚して入居するのが始まり。姑と同居の同年輩の幸子は「気楽でいいわね」と言うが、主人公の姑は合鍵を持ってるので留守でも自由に出入りし、突然来る。「いつ来るかと思うと、なんだか落ち着かないの。部屋も散らかしておけないで」と正直に答えた。心からくつろげず自分の家なのに自分の家でないような感覚の辛さ、この部分は作者が女性ならではの記述である。

娘時代に結核にかかり、やっと治って、決まりかけた縁談を破談にした主人公である。ある日、父が訪ねて来たが、お茶を切らしている。慎ましい生活である。娘を心配する父親の深い愛情が伝わってくる。

主人公より九つ年上の光江は頼りになる。一本しかない哺乳瓶を夜に割ってしまい、哺乳瓶を貸してもらったり、駄々をこねる子どもを適当にあしらってくれたりと随分助けてもらう。田舎からの産物を贈り合ったり、子どもを預け合ったりしながら二人の子を育てているうちに家が手ぜまになってくる。横浜市の郊外の新築建売住宅に当選して転居するが、転居の話を出しづらかった。ようやく打ち明けると幸子も転勤の話があり、光枝は「よかった。あなたのことだから、また損ばっかりするんじゃないかと思

って心配したよ」と言ってくれた。光江のような隣人から離れることが寂しかった。

新しい家に住んで五十年以上、今は一人暮らしで、気心の知れた隣人たちがいる。安らかな終末で作品は終わる。

作品の最終部分に横浜市の家にタテハチヨウが来て、川崎市の家にもタテハチヨウが来たのを思い出すくだりがある。構成を少し変えて、最初に川崎市の家にタテハチヨウが来たのを伏線として書いておき、最終部分に横浜市の家にタテハチヨウが再び舞うとしてどうか。タイトルも作品の一部であり「家の履歴」は無愛想なので、「タテハチヨウの来る家」はどうだろう。

優秀作推薦

「帰ったら、カレーにしよう」春野のはら(「メタセコイア」18号)

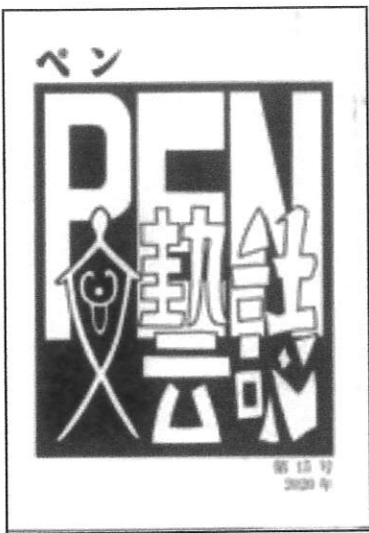
「家の履歴」山之内朗子(「狐火」25号)

●「季刊作家」（愛知県）99号
 「季刊作家」はこの号は特に充実していて、力作が揃っている。「予感」（佐藤文平）、「ある恋物語」（初山のぶ）、「虹の彼方へ」（祖父江次郎）、「真金町界限」（門倉実）、「インソムニア」（富岡秀雄）、「そして明日香へ（三）」（鈴木洋治）の作品はよく磨かれた硬度を得ていて、輝きがある。誌面の余裕がなく詳しく触れられないのは残念だが、どれも準優秀作のレベルに達している。

中でも精彩を放っているのは、鈴木友範氏の「光復香港」である。質量ともに充実した内容を持ち、最後まで圧倒感を伴って読み切らせる。返還された香港を舞台とするこの小説は、中国本土政府がその権力下に旧来の自由を奪いつつ呑み込んでいく状況下、それに抗する学生たちの反政府運動に巻き込まれ、思わぬ関わりを持つ香港在住日本人が主人公となっている。身近に飛び込んできた彼らのひたむきな抵抗運動に、自己の学生運動の過去を重ねて、その抵抗の人間の姿を本源から掘り起こそうとする意志が、文章の背後に脈打っている。香港の抵抗運動と自己の過去の学生運動とがオーバーラップして再現されるところに、この

の学生運動・民主化運動と、構造的に繋がるものがある。それらの犠牲者をただ犬死としてのみ処理できない見方を文学の一つの可能性として見るならば、歴史の中で庄殺されていく人間の、理想を目指す力を、蘇らせ、継承していく方向に形を残していくことは、全アジアの共通した課題でもあると思う。折しも、日大の理事長の不正問題が再び持ち上がり、重信房子がマスコミに再登場して、一つの節目を迎えている。厳しく振り返り、大きく把握していく大胆な試みをさらに期待している。優秀作。

●「ペン」（富山県）15号
 「ペン」は実直なひたむきさがよく出ている誌で、どの作品にも確かな生活の感覚が滲んでいて肌触りが快い。巻頭の「花に寄す」（白河葉）も、真摯に人間に向かい合おうとする意思是、色濃く伝わってきていい。



小説の普遍的広がりや国際的構造の類似性が照射されて、新鮮な息吹をもたらしている。

大きな政治権力の圧倒的力の前に、打倒され、挫折していく若い虚しい力を、全共闘運動に加わって時代打破を試みた過去の情熱の行方を思い起こして、それを問い返す姿勢は、共感を響かせる。振り返ってみると、日本をあれほど揺るがせた全共闘運動を顧みる好小説にはほとんどお目にかからない。文学的な深さを持ち、人間を掘削して結晶させている小説作品を探しても、なかなか出会わない現状で、こうした当時を真正面から取り上げて向かい合う試みに出会えたのは、大きな世代的喜びである。あの時代、嵐のように吹き抜けていった学生運動は、ただ一時の狂乱としての思い出の風としてどこかへ去っていったのか、何か人間の根本的な問題に迫るものを残していったのか否か、全共闘世代が古希を超える時を迎えて、文学的な深さを後世に残すものとして結晶させ得るのは、今しかない。その意味での一つの成果として残し得る作品であることに、拍手を惜しまない。今後さらに書き残すべきものに果敢に挑んで、あの世代の足跡をより広く、より深く残してほしい。

一つ付け加えたいのは、同じ学生世代の抵抗運動として、香港だけでなく、一九七〇年代のタイの学生運動、また一九八〇年代のビルマの学生運動、そして現在のミャンマー主宰の神通明美氏の「夏果てず」は、裁判所速記官としての記録がよく書き留められていて、普通では知り得ない裁判所の内部が垣間見えて興味深い。中に一つの人生が蔵されていて、それが文芸として脈動しているが、特に後半は職場の大きな構造的変化に筆が奪われて、記録報告の比重が増しているのが気になる。特にいいのは、速記書記官になるまでの練成期間で、筆が生き生きとしている。しかし後半は、その速記書記官を、機械録音を主とする作業に切替え、排除していく上からの大きな流れに押しされて、人間の息遣いが乏しくなっている。これは確かに書き残すべき記録である。しかし仕事が機械に奪われていく、普遍的な時代移行を背景にしているために、どうしても避けられない流れではあるもの、もうひとつ象徴的な人間の姿を捉えて、文芸として動かしてほしかった。準優秀作。

この誌には、記録として残すべき意義深い作品がいくつもあり、「牡丹江から濟州島へ——私の軍隊生活——」（三野誠司）は、当時の徴兵や現地での陸軍の日常生活がよくわかって、貴重な記録となっている。

優秀作 「光復香港」 鈴木友範（「季刊作家」99号）

準優秀作 「夏果てず」神通明美（「ペン」15号）

「予感」佐藤文平 「ある恋物語」初山のぶ 「虹の彼方へ」祖父江次郎 「真金町界限」門倉実 「インソムニア」富岡秀雄 「そして明日香へ（三）」鈴木洋治（「季刊作家」99号）

●「婦人文芸」(東京都) 101号

○一号と大台になった「婦人文芸」は、現代社会の様変わりやを反映して、新断面が窺われる。とうやまわり、ようこ氏は、佐藤浩子とペンネームを変えての再登場だが、元々筆力のある書き手なので、読ませる力は折り紙付きである。ただ今号の「ズボン」はそこそこまとまっているものの、高揚感を乏しい。親しく、よく泊まりに来る男友達の突然の縊死を軸にしているが、死因もよくわからないままに相手の親に「できていないかもしれない子供」のことを聞かれて、死をそのような形で片付けようとする姿勢に興醒めのうちにしてすべてが壊れていく崩壊感で終わっている。肉体を交えた者への喪失感もやや薄いし、その原因を追求して、死者を蘇らせ、意味を持たせようとする意思も希薄に感じられる。ただ、一つ意外に浮かび上がってくるのは、正規の社員でない臨時雇用の立場の労働の肉体的・心理的重圧である。この小説に表れるように、現在、このような非正規労働者が都会には想像以上に多く、彼らが何らかの形で追い詰められ、自死に追い込まれていくケースはかなりの多いかもしれない。それは小説作品よりもむしろその

需を支える消費者と、納税者たる労働者を産むためのものとなった。教養が忘れられた。……また、家族や恋人という価値の押し売りは消費活動を促すためでもある。携帯電話などの通信、毎年のイベント、贈答品、旅行、民間保険すべて、赤ちゃんや子ども、愛し合う夫婦の出でくるCMであふれている。このような環境で、仕事と家族(恋人)を持たない人の孤立感や孤独はいかほどであろうか。愛する人に出会ってその伴侶とともに過ごすことが人生の価値の全てだと思っている人が、お金がなく結婚できず、安い賃金で独居していたら、自分を忘れたくて強いアルコールに手も伸ばさずだろ。あるいは、孤独を忘れるために「自分を消す」選択を考えるかもしれない。この内容の方が説得力があり、男友達の自殺の原因をはっきりと言いつている。難しいが、これを小説作品として結晶させるには、もう、工夫必要だろう。タイトルも小粒すぎる。

「東京ミラクル」(都築洋子)も問題の根を同じくしている。労働事情の深刻な様変わりや下敷きになっている。目を惹かれたのは、池袋駅の地下にいるホームレスとの親しい会話である。「おう、しばし」と声をかけられたり、「コロナ禍にあつてホームレスもマスク着用を求められる」とか、「オレなんかワクチンも受けていないし、こんな人込みにいて換気も悪い地下で寝たり起きたりだけど、感染しないのは人間だけじゃなくコロナにも嫌われているってこ

後に書かれた執筆メモに詳しく、このほうが問題の根をより鮮明にしているように思えた。

「コロナ後の傾向で、やはり非正規雇用者の自殺が多いという。しかも女性が多い。……日本の賃金は悪化し続けている……しかし雇用問題よりも深刻に思うのは、価値の単純化である。恋人や結婚相手、愛する家族ということ以外に生きる価値を持ちにくくなっている。戦後の日本なら世界平和とか、国を豊かにしたいとか、病者や貧者を救う医師になりたいとか、そう言った価値が尊ばれた。だから結婚せず一人で生きていくこともできるし、価値の実現のために自ずと社会との接点を持ち得た。だが、産業界の意向を色濃く反映した教育や大学に関する国の方針は、世界平和や豊かな社会を実現する人を育てるのではなく、内

とかね」と言う言葉には、新鮮な断面がある。結婚して憧れとして移り住んだ東京は、経済の悪化とともに生活を直撃し、ローンの破綻や夫の仕事の喪失によって、離婚に追い込まれ、崩壊していく。シャボン玉のように弾けた夢を回顧し、その儚さを現在の苦しい生活の中に辿りながら、最後に傷付いた一羽の文鳥に互いの傷を温め合う結末は、好感が持てる。タイトルが大袈裟すぎて無理があるが、一時期の日本経済の夢の名残りとしての追懐は描けている。ホームレスの男はもつと生かされた。準備秀作。

●「礎」(北海道) 7号

「礎」は火打ち石を打つ意だが、その誌名のように、この誌には、奥に激しい強い意志が感じられ、硬いものが潜んでいる印象を受ける。妹尾純二郎氏への追悼号になっていて、その死が、小説「川の音」(妹尾雄太郎)の後半の軸にもなっている。この誌の発行自体が二年ぶりということからして、純次郎氏の死が、小説にも同人雑誌発行にも大きな動機になっていることが窺われる。……一枚を超えるポリユームのこの作品は、地味だが、手堅く、緻密で、その着実な刻印は、一つの地方の現実と、この世代の晩年の生き様をよく浮かび上がらせている。特に前半は精緻な筆致が地方の町や集落の衰微の真相を鮮明に伝えていて、生活の荒廃を、実感させてくれる。小説でなければできない伝達としてよく迫ってくる。遠く北海道に住みなが



2021.12 101号

85

85号



ら飛行機で往復して認知症の母を介護する困難や、その母の症状に困惑し、戸惑う、長男の立場もよく描かれていて、日本中の多くの長男が直面している問題のように普遍的な面を見せてくれる。記憶を失っていく母親の姿も、生々しい。前半をこのままでもうまく着地すればよかったと思うが、後半が弟の自死が、事件としてあまりに大きくなったしまつて、全体がそちらに引つ張られる。これはもともとテーマが異なるので、いっしょにしない方が、整っただろう。後半はいろいろなものを盛り込み過ぎる印象が強くなり、また弟の死が原因がわからないまま宙に浮くので、一篇の作品としては、明確な焦点を結ばない。テーマの根となつている川の音も前半は響くが、後半は響かなくなっている。また、現代では実家の近くににいる者が両親の面倒を



また全体の明るさは、作品の性格にも影響していて、「照葉の森」(竹宮よしみ)も読後感の晴れわたるすがすがしい作品になつている。両親に捨てられて祖母の手で育つ「さと」という女性が軸になつているが、両親への恨みと憎しみをどのように乗り越えるか、難しい問題に向き合いながら、安直な和解に走らず、手を緩めないで、高い昇華に達成させた手腕は注目に値する。こういうパターンの題材は、筆を甘くすると、鼻持ちならない抱き合い小説になつてしまうのだが、しっかり手綱を引き締めて宥和に向かわせる筆者の厳しさを伴った手腕は成功している。これは、「さと」を妻として温かく見守る夫の眼差しによつて導かれると同時に、筆者の、人間や物事をやさしく包むように捉えるその眼差しによつても導かれている。豊かな

見、話し合いで家督も継ぐのが普通になつていふと思われが、その話し合いがなされないのも不自然なように見える。少し時間を置いて書いてもよかったかもしれない。この作品はもともと評価の域外にある佇まいを備えていると感じられる。

●「amigo」(愛媛県) 87号
 明るい華やきのある誌で、鬱屈感から遠い印象は、この誌の特徴のように思える。楽しんで書いている雰囲気がある。長い小説が多く、巻頭の時代小説「阿蘭陀通詞中山得十郎ヲロシヤ滞船中日記」(安部俊吾)は前編で七八枚、「診療所奇譚(続)」(岩崎正高)も前編で四九枚、「徳島青春物語(4) 榎の木の下で」(舛田順一)も一八枚と賑わっている。

また万葉集についての観賞エッセイ「ズームイン・万葉集(七)——想いをこめて——」(橋本道子)も長く続き、万葉集の短歌を現代の視点を入れてその世界が生き生きと浮かび上がるように書いている再生力豊かな文章は、万葉集を二倍楽しませてくれる。このようにわかりやすく、しかも当方が鮮やかに蘇ってくる書き方は、長年の万葉集への深い造詣よつてのみ得られるものだろう。筆者の研究の蓄積が感じられると同時に、万葉集への深い愛情が漲っている。文芸思潮の短歌読者にも読んでほしい。推薦作である。

読後感が残る、好短編。推薦作以上としたい。

●「海馬」(兵庫県) 45号
 この誌は不思議な雰囲気を持つていて、現実と非現実の間を何の抵抗もなく擦り抜けている自在な感覚がある。それは正常と狂気の間とも言えるし、この世とあの世の間とも言える柔軟な透過感である。三つの小説に共通した基盤が感じられ、「レリビー」(吉岡辰兎)にも、「不能者」(山下定雄)にも、「陰と陽の肉体(前半)」(永田祐司)にも共通している。

特に「不能者」は精神の病を抱える主人公が、同棲するカンナという愛人を置いて、精神病院に入院するだけに、その間の危うさが際立った小説になつている。カンナ



全国同人雑誌振興会

との関係がこのままだとダメになる危機を覚えて精神病院に自ら入るのだが、そこでまた女性看護師と観念的恋愛の火花を散らせる。「私もし正気であるなら、彼女も正気であり私が狂気であるなら彼女も狂気であろう。私はその眼差がどのような色合に燃えているのであろうかとおもうだけで身内がかつかと火照ってどうにもこうにも収拾がつかない混乱を覚えた」――読者はこうした異質な世界に巻き込まれ、絡み取られていく。精神病院での看護師との恋愛など現実には難しそうであるにもかかわらず、その激しい異様な叙述によって、否応なく踏み込まれていく。それは事実から遠い世界でありながら、激しい燃焼力によって、現実には置き換えられていく。これは普通のリアリズムとは違った、妄想の強さによるリアリズムである。確かにこれは一つの陶酔を呼び、ある強度を持った世界であるにはちがいないが、それが現実の世界に還元されるかと問われたとき、明確に答えられないもどかしさが残る。それは確かな狂気であって、確かな現実ではない。酩酊の深さはあるが、戻って覚醒するための回路がない。むしろ、現実そのものが幻なのだからそのまま行ってしまうだけの回路があれば、それで十分ではないか、とも言えるが、また戻ってくる回路によって、現実そのものが逆に強固になる側面も否定できない。この独特な「ワールド」をどう捉えるか、評価の違いが予測される。推薦作としたい。

うまく溶け込んでいる。周囲の喫茶店経営者の友人もその夫の画家もそれぞれ個性を持って老年への流れを自然に醸し出している。無理をしない素直な筆が、この受容的な老年の姿勢によく合い、それが自然や死や終末を大きく受け入れて、遙かなものへ溶け込んでいく広がりを感じさせる。優秀作としたい。

「会議からの生還」(木島文雄)は、企業内部の状況がリアルに描かれており、その迫真力は稀有なものがある。どの企業もこうした激しいやりとりのうちに成り立っていると思われ、このリアリティには新鮮さを感じる。文学や小説としてはもう一つ欲しい気もするが、ここまで出した迫真力は讃えたい。准優秀作。

今季をまとめる。

優秀作 「白詰草」

推薦作 「不能者」

「スームイン・万葉集(七)―想いをこめて―」

(繞木道子) 「amico」 87号

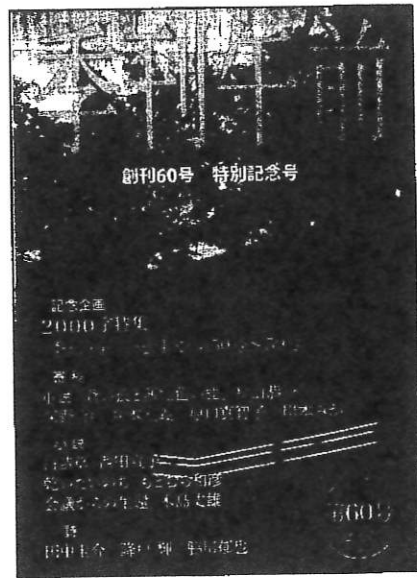
「照葉の森」(竹宮よしみ) 「amico」 87号

准優秀作

「東京ミラクル」(都築洋子) 「婦人文芸」 101号

「会議からの生還」(木島文雄) 「季刊午前」 60号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

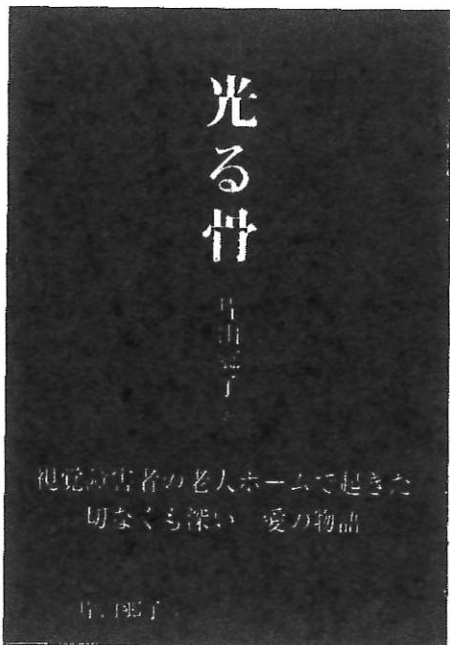


●「季刊午前」(福岡県) 60号

「季刊午前」も60号を迎えた。心からの祝意を贈りたい。洗練された誌面と毎号の工夫された企画は、同人雑誌のあり方の一つの見本となるだけの姿を備えている。今号は「二〇〇〇字特集」で、それぞれが創意を凝らした文章を紡いでいる。よくできた短編が揃っていて、大いに楽しめる。さすがに皆芸達者とあらためて感じさせられた。

60号ということで、故北川晃二を追悼しエッセイも記念を深め、「季刊午前」の奥を潤わせている。こういう潤滑が、また未来への企投を大きくするものと思われる。

西田宣子氏の「白詰草」は、老年の一つの姿が自然な流れで書かれていて、雰囲気よくまとまっている。華々しい花より野の花に魅かれる自分の絵の拘りも、ストーリーに



殿芝千恵

●「私人」107号（東京都）

上品な装丁と適度なボリュームで、まず物理的に手に取りやすい。全体的に社会問題を扱った作品が多い印象だった。特に「お腹がすいた」（杉崇志）はよくある児童虐待がモチーフかと思いきや、加害者側の視点が執拗に描かれており、初めは味方であったはずの母親が加害者である父親に言葉と暴力によって支配されていく様子について引き寄せられる。改めて、家庭の中にある不幸は幸福と同じく、結果が同じでもその過程は様々であると思ひ知らされる。複層的な視点で描かれているこの作品の中で唯一、妻の母つまり主人公の義母の心理描写がほとんどないことが残念。ゲームチェンジャーとしての役割を持たせられたのではないか。

他には、一般の人間にはとにかく不可解で難解な、原子力発電事業についての作品「水戸の梅」（根場至）を挙げたい。昭和のサラリーマンの視点で日本エネルギー事業の光と闇、そこに翻弄される人々の小歴史を紡いでいて、正確な情報の記述と登場人物の心理描写のバランスが絶妙。日本の科学技術が国民のプライドを支えていた頃の残り香

してくれる。

特に「フォト・ピストル」（香山マリエ）は信じる力の恐ろしさと、信じることしかできない女の弱さを如実に優しく、抒情をもって私たちに提示してみせた。人は自分が赦される前に先手を打って赦すことで何らかの優位性を保とうとしているのかもしれない。何もかも失ったトオルの母が最後に呟く「赦して」の重さに読者はきっと嘘寒い思いをするに違いない。他の作品もよく練られてはいたが、この作品ほどの心地よい着地点を得ることはできず、ふわふわと宙を漂うがごとのラストが多かった。

●「あるかいど」72号（滋賀県）

老舗の同人誌だけあって完成度が高かった。全体に通じるテーマは「災害と病苦」だろうか。中高年の男女に降り



あるかいど

を感じた。大震災で受けた傷の大きさとその後の復興の困難さに目を奪われ、開発に関わったかつての英雄たちにもあったはずの喜怒哀楽や人生の隙間風に見ないふりをしていたのではないかと気づかされる作品である。

●「遠近」79号（神奈川県）

描写に臨場感があり、決してドラマチックな出来事ではないのに吸引力のある作品が多かった。登場人物の心情表現在寄り添い、つい同調させられてしまう「乗せ上手」な作者の宝庫。なかでも力のこもった時代小説が存在感を得たつが、正直読むのに体力がいる。小説によって教養を得たいと思う読者には良いかもしれないが、あまり情報をつめすぎると楽しむより以前に理解する方に視点が傾いてしまいうからだろう。しかし、この同人誌は編集者のセンスが抜群に良く、冒頭の数編の小説がその精神の目詰まりをほぐ



かかる様々なアクセシビリティが彼らの人生を掻き回し、感乱させ、再生させていく様に魅せられた。やはり作者の年齢層にダイレクトに響くのか、「介護」「施設」というキーワードはかなりよく目についた。

その中でも読ませる力を感じたのは「鳩を捨てる」（住田真理子）。施設に人所させやれやれと思ったのもつかの間、せん妄に悩まされる母の尻ぬぐいに奔走する娘の日常をコミカルに描いている。が、捨てても捨てても舞い戻る鳩の執拗さにぞっとさせられてしまう場面は作者の表現力の真骨頂だろう。捨てきれない肉親の血の呪いを彷彿とさせるからか、とにかく目が離せない。最後の母の「がんばれえ、鳩、がんばれえ」は心底、怖い。肉体の健康を失った時、人の内面には感情も煩惱も色濃く燻るものらしい。それを当事者目線でぶつけてくるのが「面会時間（Visiting Hours）」（切塗よしを）と「オーロラ」（池誠）。前者は人間の誠実でくるんだツンデレ男女愛、後者は健康と仕事と家族を失った男の埋蔵金への執着という全く違う方向の煩惱だが、両作とも清々しいほどに自分本位な心象描写がいつそ快かった。

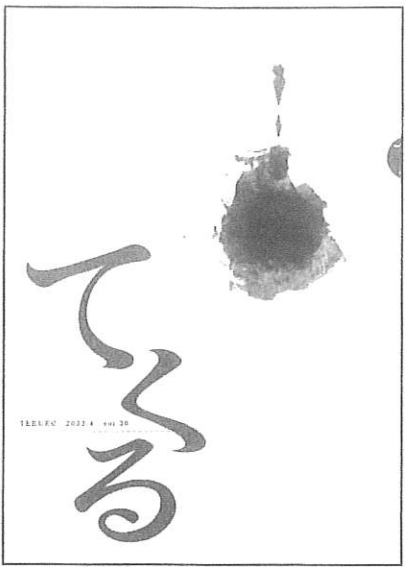
●「白鴉」32号（兵庫県）

まずその大きなサイズに驚かされる。普通の同人誌のサイズはA5なので、携帯には不便なA4版は考え直した方が良いのではないか。ただその内容については、同じ方向



を目指しがちな同人誌においてバリエーション豊富だったことは特筆すべきだ。

特に「思いがけなく」(大新健一郎)は出色の出来であった。ごく普通の父子家庭として暮らしていた遠藤孝之はある日、一人娘の奈美の事故と入院の知らせを聞く。事故を知らせに来た、しかし身分を明らかにしない二人の男から詳細な情報を与えられずただ自分達に全てを任せるように言われた孝之は疑心暗鬼にかかる。最後に彼がとった行動は想像の余地を残してほやかさされているが、ここで大切なのは結末の彼の行動ではなく、善良な一般市民が国家の思惑にからめ取られた時の無力のやるせなさが描き切れていることだろう。これだけの枚数で平凡な家庭がその不幸を誰に相談することもできず、角砂糖が溶けるように瓦解していくさまは焦燥感を大いに刺激した。



自分の夫はかつてのいじめの首謀者という事実にはピリッと動かない「ぼく」の母の凄さでもう一本書けそうな予感がする。

「さかなちゃん」(田中一葉)もよかった。男に薄く裏切られても相手を憎めない主人公にイラつかされる。が、自尊心の育て方を知らない弱い人々の鈍感力の思いもよらぬ救いの力を読み取れる秀作。本当のことなど知らなくてよいのだ、と思ってしまう。

●「海馬」第45号(兵庫県)

ダントツに面白かったのは「陰と陽の肉体(前半)」(永田祐司)。読後の第一印象は「あか抜けた日本沈没」。コロナ禍と不景気を上手に組み合わせ、世情不安からスーパードナルドを求める人々のよるめきを魅力ある文章で展

他にも不条理なSFが奇妙な味付けで楽しませてくれた。「花と猫」(早水瑠美)。

あと、読後感はやや冗長ではあったが扱いにくいモチーフであるう男性の抒情を細やかに描写しきったという点では「にわたずみ」(水無月うらら)も評価したい。改めて日本語の美しさを感じさせてくれる穏やかな描写は目にとっても優しかった。

●「TUNE」第30号(滋賀県)

日常に隠れた胡散臭さや、親しい人とのコミニケーションで感じる感情のささくれなどを上手に拾いあげた作品が多かった。奇想天外な状況での物語を提示してくれた作家もいたが、あまりに遠い世界の描写はそこに生きる人たちの感情がせめて自分たちに寄り添わないとどこまでも他人事ではない。

そういった点で生臭いほどの日常の息遣いを感じたのは「中野先生」(佐藤弘二郎)。主人公はごく普通の中学生男子だが、クラブ顧問に根暗な教員が登場するところから暗雲が立ち込める。ひと世代前のいじめの負の連鎖が次世代の幼馴染三人をゆっくりと追い詰めていく。その中の一人の少女は真面目な母子家庭の中によろしからぬ義父が入り込むという悪環境にいる。作者の匙加減によってはとことん暗くなってしまう話がかか一抹明るく、乾いた笑いを伴って目の前を通り過ぎていくのがよい。それにしても、

開いている。お年頃の男三人に美女一人という組み合わせは読者をわかりやすく下衆な楽しみに誘い込み、登場人物たちはこぎれいに言い訳をしているが、予想通りの展開に安定した楽しみを感じられた。加えて、怪しさ満載の気功の世界についてそれなりの科学的根拠を用意し、説得力のある展開を試みているところの両方に作者の誠意を感じた。格好をつけず、とことん読者の楽しみために書いてくれている姿勢が伝わる。しかし、かなりの大風呂敷を広げた後をどうやってきれいに折り畳むのか、筆者の力量を後半でぜひとも確かめたいと思う。

もう一つ、楽しみにしていた連作「不能者」(山下定雄)。前回の「葛藤」が良すぎたのか、正直楽しめなかった。タイトル通りの意味しか読み取れない、分かりやすい狂気では物足りない。「私」の中に潜む、静かで大人しい狂気の後日譚が読みたかったのだが、これは連作ゆえの構成上の必要部分なのか。完結するまでは評価が難しいのだろうが、取って言うおう。普通に狂っている「私」に求心力はない。彼はもっと奇妙で、もっと薄気味悪く、遠巻きにずっと眺めていたい欲求を私たちに抱かせる魅力を持っていたはずだ。次回作でその魅力が存分に炸裂することを期待する。

86号

森村和子

●「四国作家」54号（香川県）

「幾太郎の事件」（三木倍美）は史実に基づく創作である。幕末、日本の近海のおちこちに外国船が現れるようになる。瀬戸内海の小島、小豆島の近海にも外国船は現れた。小豆島を領地とする幕府の親藩津山藩は、小豆島で異国船の海防訓練を行い、村人に「異国船に近づくな」と命じていた。

一八六四年（元治元年）八月二十五日、十九歳の幾太郎は桶屋の仕事が休みになったので、仲良しの庄太郎家の漁網を引っ張る手伝いに行った。三日前から長州と戦ってきた英国船が魚を買ってくれ、銀で払ってくれた。魚を買ってもらった後、英国人が小型船の大砲を停泊していた船に運び上げるのを幾多郎と正太郎達が手伝うと、英国人は砲器類を見せてくれた。好奇心いっぱい幾多郎は若い異人の短筒を喜んでのぞきこんでいたら、突然中から爆発して発砲する形になり、幾太郎は死んでしまった。異国船が絡んだ殺人なので代官所へも届けた。それに立ち会わなければならなくなった伊兵衛が、船を出してもらい異国船に行くと、異国船は船長が丁寧に応接してくれた上に、詫び、

伊兵衛とともに江戸に赴き、英国に抗議の談判をした。翌年一八六五年（慶応元年）英国が正式に謝罪し、洋銀二百枚の賠償金を払った。

伊兵衛の慎重さ、清廉で誠実な人柄と正義感、鞍掛の有能さが伝わってくる。さらに、気さくで親切な大殿が好奇心満々で伊兵衛に直に話を聞く様子がおもしろい。鞍懸と伊兵衛が江戸時代の制度の「飛船」に乗って津山へ向かうのも、話を盛り上げている。小豆島の暮らしや津山藩の統治、事件の速因になった運上の銀納などを物語の中で無理なく語っている。江戸時代の中央集権体制が、こんな末端の若者の死をもなおざりにせず、しっかり対応し、中央まで話が届き、きちんと謝罪と賠償を獲得したことに恐れ入る。イギリスの姿勢も公正である。津山藩が親藩だったこともあったのだろうが、それぞれの部署でかわった人が、ごまかさず正確に話を伝え正当に扱った結果である。幕末でも幕府の統治機構の揺るぎのなさを示している。日本が初めて異国から正式な謝罪と賠償を獲得した幕末の歴史的な一事件である。

作者はたくさんさんの資料にあたって読みこなし、時間をかけてこの作品を書いたのであろう。労作である。

●「クレーン」43号（群馬県）

「東日本大震災——仙台市民の記録」（せとたつ）は生々しい記録で迫真力があつた。筆者は東日本大震災に遭遇し

金子を差し出し、酒肴をすすめてくれた。しかし、伊兵衛は受け取らず、酒肴も辞退する。その後、総大将の提督の大船に案内され、提督が詫び、金子と酒肴を提供されるがまた断り、夜半に陣屋へ出頭した。翌日には幾太郎の野辺送りをした。

九月六日に役所からの出頭命令で伊兵衛は陣屋に出頭した。津山の隠居の大殿様（松平三河守斉民、号は確堂）の指図で、津山から来た若い鞍懸寅二郎が取り調べをした。伊兵衛に対し上からではなく対話のように話を進め聞いてくれた。伊兵衛は銀納が困難の事情も含め、笑顔で死んだ幾多郎の立場や、大砲を見慣れていること、金子、酒肴の辞退などを率直に話した。翌日津山へ赴き大殿様にお目通りをした。藩主は「この若者はわが藩の良民である。藩の手で異国に対し、正式の謝罪と償いを」と言い、協力を求められた。「異国とのもめごとで、本邦初の異国から謝罪や賠償を求める大仕事」と鞍懸は大殿直々の書翰を預かり

た、一人暮らしの高齢女性である。水も電気もガスも止まり、家は壊れ、中は家具が倒れ散乱している。年齢と女ひとりであることを考え合わせると、落胆し打ちのめされ立ち直れなくても仕方がない状況である。それでもそこに踏みとどまり、近隣の人や、知人、親類の人々の助けを得て、心豊かに暮らし、生活を立て直した。家は公的資金も得て、耐震補強工事を施し修復を成し遂げた。

震災後の出来事を記録する日記の文章は具体的で、生き生きと状況を伝えている。内容は、災害の多い国日本に住む私たちにとって多くの示唆を含んでいる。ぜひ、広く読みたい作品である。

ただ、登場人物が多いので、掲載されたままではゴチャゴチャして人間関係がわかりにくい。日記文の前に、筆者と登場人物の簡単な説明があると読みやすくなる。

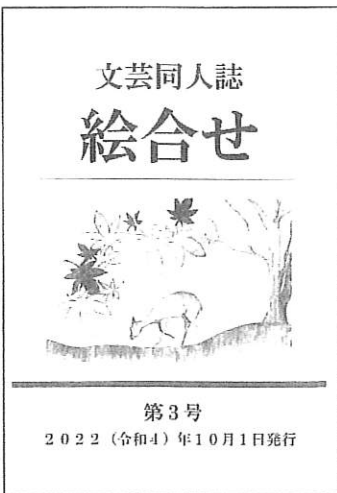
エッセイの「オンライン将棋を楽しむ」（和田伸一郎）は、将棋をする人の心理も書き込まれていて、おもしろく読めた。



●「絵合せ」(福岡県) 3号

「絵合せ」は、まだ3号と日が浅いが、書き手は揃っている。波佐間義之、蓮実夏、見良津珠里子と、実力ある作家が並んでいる。書くことへ情熱が匂ってくる誌だ。

今号は特に後藤克之氏の「逸脱」がよかった。これは一〇〇枚ほどの力作で、推理小説のストーリー展開の上に、最後まで牽引力豊かに読ませる。九十歳の孤独な老婆が殺された事件を巡って、二人の刑事が犯人を突き止める筋立てでゲンゲン進んでいく展開はおもしろく、飽きさせない。筆力は十分で、随所に筆者の実力を感じさせる人物描写やシーンが流れをうまく構成している。人物の特徴を掴む筆は冴えているのだが、それがしかし人間の奥深くを抉り出すところまで届いていないのが、惜しまれる。いったいに、こうした推理小説が真の文学の力を発揮するのは、推理小説のうまい運びやその謎解きの鮮やかな完結性にあるのではなく、それを通して、いかに人生や人間の矛盾を浮かび上がらせるかにある。読み終わって、それが大きく浮かび上がるかどうか勝負のしどころだろう。この小説は、容疑者が二人浮かび上がり、それを追い、犯人と犯罪



文芸同人誌
絵合せ

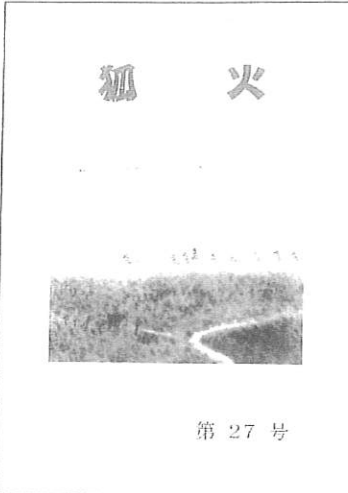
第3号
2022(令和4)年10月1日発行

を追い詰めていくストーリーになっていて、アリバイに駅の傘の紛失物届けを使ったりするところはよく工夫がしてあるが、肝心の老婆の孤独や、訪ねてくる中年独身男性の心の中や、隣にたまたま住んだ昔の恋人の内面や殺人動機は薄いままになっている。ことに最後になって、昔の恋人がすぐ近所に住んでいたというのは、後出しジャンケンで、それまでの推理構築が破綻する。この殺人動機と推理展開を通して、それぞれの内面のドラマをもっと深く描き出し、今日の孤独な老人の生き方や心理、老いの恋や、悪いと知りながら話し相手になって老婆のお金をくすね続ける中年独身男性の心の空白を時代の心象風景として描き出して別出できていたら、ずっと深い現代のドラマになっていただろう。それぞれの人間の心の中の問題まで露わにすることが、純文学としての仕事はずで、惜しいところで止まってしまうという無念さがある。書き直してもいいのではないか。準優秀作。

●「狐火」(埼玉県) 27号

いつも地道に創作を続けているこの誌は、全体に文章に味わいがあり、とけるような滋味が匂っている。

澤つむり氏の「小鬼やらい」は、いつも自分の中に頭をもたげるその場に反した反抗衝動をうまく捉えていて、不吉な問題呼び込んでしまう人間の中の困った行動を表現している。確かに人の心の中には、必ずしも建設的で同調的な行動だけが存在するのではない、自分でも気が付かないような反社会的な、その場を壊す衝動も潜在している。普段はそれをいろいろな形でうまく制御しているだけなのかもしれない、それがどういふところから出来た、どういふところからそれを内面に飼ってしまうのかわからないまま過ぎている。この小説はそれを書いていて、うまく擬人化しつつ一篇の小説にまとめ上げている。その手腕はさすがだ

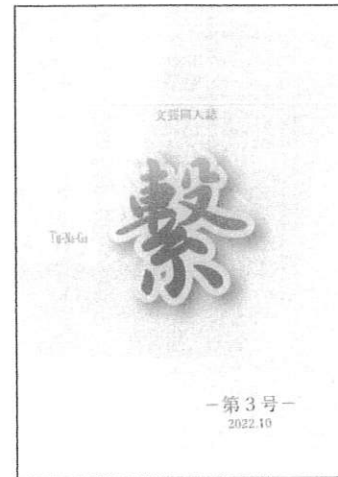


第 27 号

●「繫」(富山県) 3号

新しい雑誌だが、強者揃い。飯田芳、寺本親平両氏はまほろば賞、まほろば特別賞をそれぞれ受賞している。むらいはくどう氏も北陸では音に聞こえた書き手である。

寺本親平氏の「血の湯」は、独特の語り口で異世界へ導いてくれる。琵琶奏者でもある筆者は、その壮烈な楽音のうちに、古の時空間へ一気にひたらせ、過去の因果応報と修羅の血生臭い世界へ読者を突き落とす。この世界に血が湛えられた温泉があるということ自体、強烈で、そこに罪



業と奇怪とを癒し、再生させる復活の奇跡があることを、華々しい幻想絵画の巡りのうちに展開していく。歴史に底流する血の流れと、異常の変化の罪が合流し、再生復活への幻想ではなく、過去の夥しい血の犠牲の集積の底に潜む生々しい現実であることを、教えてくれる。ムカデや蛇笏と同次元の生き物の蠢きが、忌まわしさの中にむしろ再生の力を得て、天への上昇力となる。命の復活をうまく生命の根から血の幻想に載せて具現化した。優秀作。ただ細かい点で文章に手を入れる必要あり。

飯田芳氏の「私のエンゲル」は暴力夫からの逃亡を軸に避難先の金沢の恩人の飼犬エンゲルとの愛情を書いているが、まほろば賞作家らしからぬ安易な筋立てで、まずい酒を飲まされたような失望感があった。主人公の「私」が女性であることも不自然だし、DVも週刊誌的な既視感の上に浅く不快に描かれており、避難先の犬もリアリティが

ない。元々素材に無理があり、こういう素材をいくらうまく書き込んでも、光を発しない。もっと素材の選択に、意を注いでほしい。まほろば賞作家ともなれば、素材の選択や構成、表現にもっと時間をかけ、あまりの駄作、失敗作を出さぬよう発表にも慎重になってほしい。「あれはプロックだったのか」と疑われるのは不本意だろう。

●「日曜作家」(大阪府)40号

毛色の変った書き手がいるこの誌は、不思議な魅力がある。それぞれが独特な視点、独特な世界を持っている。特に今号で目立ったのは、「迷宮のアグリアス」(小邑咲也)だ。これは蝶の採集小説であると同時に、フランスの珍蝶のコレクターせり市まで繰り広げて、見知らぬ世界を見せてくれる。しかも蝶はカラーで印刷されており、手のこんでいる表現は比類がない。こんなに鮮やかで色のきれいな蝶がいることも新鮮だし、この蝶がいかに珍しく、



86号

一羽がいかに高価な値段が付けられているのかも、驚きだった。フィリピン「ベンゲットアゲハ」や「アカネアゲハ」アマゾンの「ミイロタテハ」などその地での採集の様子も、臨場感に溢れ、風土が息遣いのうちに匂ってくるような錯覚さえ覚える。また「タランチュア」まで売り買いされているパリの「インセクトフェア」も未知の世界でおもしろい。オークションでミイロタテハが五〇〇万円まで吊り上げられるところなど、盛り上がるが最後に犯罪がらみのオチがあつて、小説的フィナーレは少し興が削がれるが、珍しい世界を見せてくれるという点では、推薦作には推したい。

●「文芸中部」(愛知県)119号

「クローゼットの中の家族」は久々に北川朱実氏の力作に触れることができた。アパートに一人住まいの女性の部屋に愛猫の死骸が段ボールに入れられて配送されることから小説は始まる。血だらけになった猫の死骸に「私」は

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八覚正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文學界新人賞)・小浜清志(文學界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)

「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇 A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
エッセイ		50枚まで	10000円
1篇 5枚以内	5000円	100枚まで	15000円
10枚以内	6000円	200枚まで	20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

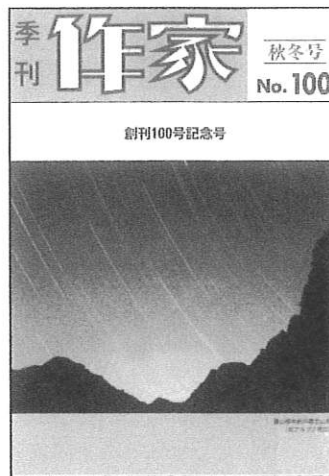
●ご希望の方には案内書を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

bungeisc@asiawave.co.jp



トルももう一つピッタリこない。以前これに似たものを読んだような気もするが、最後とタイトルを修正してもらって、それがうまく行けば、優秀作。

朝岡明美氏の「曼珠沙華」は、彼岸花の象徴性がよく、出だし

ショックを受けるが、追い討ちをかけるように、それから猫の死骸に関係したものが手紙といっしょに届けられるようになる。相手は名前も住所も記されていない。一種の死骸ストーリーかじみた恐怖に包まれ、それから逃れることを必至に試みるが、警察は取り合ってくれず、疑心暗鬼のうちにノイローゼに陥っていく。しかしあるとき、近所の孤独死した元大学教授の家から、「私」宛の手紙が発見されたことから、この老人が犯人であったことがわかる。老人は十年前に妻に先立たれた身で、しかもそれより前に五歳の一人息子を交通事故で亡くしている。寂しさと認知症の混じった孤独地獄の中の叫びがそこには充滿していた。最後、外国へ旅立つという自治会長宛の手紙は、やりすぎの観がある。もっと身近なものの中に収束させた方がよかつただろう。またラストで「怒声が聞こえる」「すすり泣きが聞こえる」「笑い声が聞こえる」と畳み込んで終わっているのも、拡散してしまつて着地に失敗している。タイ

で死と近接する何かが始まりそうな気配がいいが、それが結末に響いてこないのが惜しまれる。後半もつと事件や人間に死の気配を絡ませてフィニッシュとし、曼珠沙華の花を見事に咲かせれば、いい作品になっただろう。準優秀作。

●「季刊作家」（愛知県）100号

「季刊作家」はついに一〇〇号に達した。この継続に心からの称賛を送りたい。「季刊作家」からは、津田一孝氏の「送り火の夜」、また今年の鈴木友範氏の「光復香港」と二人のまほろば賞作家が出ている。この厚みはそれ以前の「作家」からの伝統の上での成果であろうし、それを引き継いだ祖父江次郎氏の持続の労苦の上での結実であろう。一〇〇号は意義深く、拍手を惜しまない。「創刊一〇〇号の記念エッセイ」が同人から寄せられているが、そこに到達までの足取りも窺われていい特集になっている。本来「季刊作家」は地味な色彩のうちに重みと味のある

作風に軸があるが、この号は特にそれがよく表れていて、巻頭の佐藤文平氏の「見返り」と祖父江次郎氏の「枯野」に、人生を総括する時期でなければ書けないテーマが浮かび上がっている。

じていて、ひとまずの終息になっているが、晩年の灰色の景色の息遣いはよく出ている。この雰囲気にもつと自然の描写を深く鮮やかに書き込んで、人生の終焉の模様を自然の中からも重ねて深めればさらに陰影は深まったろうと思われる。これも優秀作に推したい。

今号をまとめる。優秀作

- 「血の湯」寺本親平 「繫」3号
- ▲「クローゼットの中の家族」

- 「見返り」佐藤文平 「季刊作家」100号
- 「枯野」祖父江次郎

推薦作

- 「迷宮のアグリアス」小邑咲也 「日曜作家」40号
- 準優秀作
- 「逸脱」後藤克之「絵合せ」3号
- 「小鬼やらい」澤つむり「狐火」27号
- 「父の庭」山之内朗子
- 「曼珠沙華」朝岡明美「文芸中部」119号

「枯野」も、定年後妻に先立たれて一人侘しく暮らす主人公の晩年の日々を、様々な変化の流れの上に身を浮かばせるようにして過去を振り返りつつ、枯れていく人生の風景を味わい深く表出している。羽振りのよかつた昔の同級生に出会い、その凋落ぶりに肩を寄せ合うようにして競馬に興じる老年の姿も、晩年の淡い色を醸し出している。その友の自殺と飼ひ猫がアライグマに噛み殺されるところで閉